宮崎市文化財調査報告書第４３集

北ヶ迫遺跡

宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

序

本書は、宅地造成工事に伴って平成10年度に実施されました、北ヶ迫遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書であります。北ヶ迫遺跡は縄文時代から近世にかけての遺跡で、調査では住居址をはじめとする様々な遺構が検出されました。また、各種の土器や陶磁器など、各時代の遺物も多数出土しています。いずれも、各々の時代における人々の生活を彷彿とさせるもので、この地が古くから栄えてきたことを思い起こさせるものばかりであります。

北ヶ迫遺跡の例に待つまでもなく、開発に伴い発掘調査される遺跡は数多くあります。三内丸山遺跡や妻木晩田遺跡などのように、発掘調査によって古代史を書き換えるような大遺跡が発見されることも珍しくありません。また、それらの調査から提供される膨大な史料が、近年の考古学をはじめとする歴史研究の飛躍的な進歩を支えているともいえます。しかし、一方でこれらの発掘調査は、貴重な遺跡を破壊することでもあります。開発によって、数多くの遺跡が永遠に失われていることも、また事実なのであります。

現代社会における経済活動の重要性を鑑みれば、地域の振興と文化財の保護を両立させ、調和した地域社会として発展することが、今後ますます重要になると思われます。文化財行政、特に埋蔵文化財行政に携わる我々としても、与えられた職務の重大さを充分認識し、埋蔵文化財の調査・記録のみならず、広く文化財の保護やその活用に努力していく所存でございます。

最後になりましたが、発掘調査に従事された作業員の皆様、ご協力いただきました関係機関の方々に心からお礼申し上げますとともに、本書が学術研究や郷土の歴史解明の一助とならんことを祈念いたしまして、発刊のごあいさつといたします。

平成12年3月

宮崎市教育委員会

教育長　内藤泰夫

例　　言

1．本書は株式会社[redacted]による宮崎市大字島之内字北ヶ迫における宅地開発に伴う事前発掘調査の報告書である。

2．調査は平成10年４月20日～平成10年８月11日までの期間で宮崎市教育委員会が実施した。

3．調査主体　　宮崎市教育委員会　文化振興課

（平成９年度）

調査総括	課　長	野　間　重　孝
	係　長	永　井　淳　生
庶務担当	主　事	竹　野　隆　司
調 査 員	技　師	稲　岡　洋　道
		時　任　直　也
補 助 員	嘱　託	椎　　由美子
		松　永　光　雄
		小　川　正　子
	学　生	河　野　賢太郎

（平成10年度）

調査総括	課　長	野　間　重　孝
	係　長	永　井　淳　生
庶務担当	主　事	竹　野　隆　司
整理担当	技　師	稲　岡　洋　道
補 助 員	嘱　託	椎　　由美子
		松　永　光　雄
		小　川　正　子
		河　野　賢太郎
		久　富　なをみ

4．本書の執筆は稲岡が行った。

5．掲載図面の実測、製図、図版の作成は稲岡、河野、椎、松永、小川が行った。

6．現場での写真撮影は稲岡、時任が行った。遺物写真撮影は稲岡が行った。

7．本書の編集は稲岡・久富が行った。

8．本書で使用した空中写真は株式会社スカイサーベイによるものである。

9．本遺跡出土遺物は宮崎市教育委員会が保管している。

10．本書実測図中で使用した遺構略号は以下の通りである。

ＳＡ－竪穴住居　　ＳＢ－竪穴状遺構　　ＳＣ－土坑　　ＳＤ－道路状遺構

ＳＥ－溝状遺構　　ＳＦ－陥穴状遺構　　ＳＳ－柵列　　ＳＴ－掘立柱建物

Ｐ－各遺構に伴う柱穴　　pit －遺構に伴わない柱穴

11．実測図中の ┌┬┬┬┬┐ │　　│ └┴┴┴┴┘ は攪乱である。

12．実測図中、破線は、復元推定ラインである。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　立地と歴史的環境…… 1

第Ⅱ章　調査の結果…… 5
　第１節　調査の概要…… 5
　第２節　遺構と遺物…… 13
　　(1)　遺構…… 13
　　(2)　遺物…… 33

第Ⅲ章　まとめ…… 54

挿　図　目　次

第１図　北ヶ迫遺跡位置図…… 3
第２図　北ヶ迫遺跡周辺図…… 4
第３図　北ヶ迫遺跡調査区図…… 6
第４図　Ａ区遺構配置図…… 8
第５図　Ｂ区遺構配置図…… 9
第６図　Ｃ区遺構配置図…… 11
第７図　Ｄ区遺構配置図…… 14
第８図　Ｅ区遺構配置図…… 15
第９図　１・２号竪穴住居実測図…… 16
第10図　３～５号竪穴住居、10・23号土坑実測図…… 17
第11図　６・７号竪穴住居実測図…… 18
第12図　１・２号竪穴状遺構実測図…… 19
第13図　１号掘立柱建物実測図…… 20
第14図　２・３号掘立柱建物実測図…… 21
第15図　４・５号掘立柱建物実測図…… 22
第16図　６号掘立柱建物実測図…… 23
第17図　７・８号掘立柱建物、１号柵列実測図…… 24
第18図　２・３号柵列実測図…… 25
第19図　１・２・４・５号土坑実測図…… 26
第20図　６・７号土坑実測図…… 27
第21図　８・９・11～14号土坑実測図…… 29
第22図　15～22号土坑実測図…… 30
第23図　１・２号陥穴状遺構実測図…… 31
第24図　出土遺物実測図（1）…… 34
第25図　出土遺物実測図（2）…… 36
第26図　出土遺物実測図（3）…… 37
第27図　出土遺物実測図（4）…… 39
第28図　出土遺物実測図（5）…… 41
第29図　出土遺物実測図（6）…… 42
第30図　出土遺物実測図（7）…… 44
第31図　出土遺物実測図（8）…… 45
第32図　出土遺物実測図（9）…… 46

表　目　次

第１表　出土遺物観察表１（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）…… 48
第２表　出土遺物観察表２（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）…… 49
第３表　出土遺物観察表３（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）…… 50
第４表　出土遺物観察表４（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）…… 51
第５表　出土遺物観察表５（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）…… 52
第６表　出土遺物観察表６（陶器、磁器）…… 53

図　版　目　次

図版１　北ヶ迫遺跡全景①（東上空より）…… 57
図版２　北ヶ迫遺跡全景②（上空より）…… 58
図版３　Ａ区南側、Ｂ区北側、Ｄ区周辺（上空より）…… 59
図版４　Ｂ区南側、Ｃ区周辺（上空より）…… 59
図版５　現場状況 ①…… 60
図版６　現場状況 ②…… 61
図版７　現場状況 ③…… 62
図版８　現場状況 ④…… 63
図版９　現場状況 ⑤…… 64
図版10　現場状況 ⑥…… 65
図版11　現場状況 ⑦…… 66
図版12　現場状況 ⑧…… 67
図版13　現場状況 ⑨…… 68
図版14　現場状況 ⑩…… 69
図版15　出土遺物 ①…… 70
図版16　出土遺物 ②…… 71
図版17　出土遺物 ③…… 72
図版18　出土遺物 ④…… 73
図版19　出土遺物 ⑤…… 74

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

北ヶ迫遺跡はもともと畑地であったが、株式会社[redacted]より宅地造成計画が持ち上がり、平成８年２月28日に都市計画課を介して、開発事前指導申請書が提出され、平成８年６月、当該地域の埋蔵文化財の有無についての照会が文化振興課に提出された。文化振興課では当該地域の周辺に前田遺跡、国指定史跡蓮ヶ池横穴群、県指定史跡住吉村古墳といった周知の遺跡、指定史跡が存在していることから、横穴群、集落跡の遺跡の存在の可能性があるため、開発に先立つ試掘調査が必要であると説明した。

それに基づいて、平成８年11月14日、15日にトレンチ調査による試掘調査、横穴確認のための現地踏査を行った結果、横穴の存在は確認されなかったものの畑地部分において遺物、遺構が確認されたため、開発に先立ち、本発掘調査が必要である旨を通知した。その後協議を行った結果、平成10年３月３日付けで株式会社[redacted]より「文化財保護法57条の２第１項の規定」の工事通知の届出があり、同年４月20日～８月11日の期間本発掘調査を実施した。

第２節　立地と歴史的環境

宮崎平野の中央部を流れる大淀川左岸の最高約120.5ｍの洪積台地（通称　垂水台地）は開析した丘陵が宮崎平野にむけて幾方にも伸びている。それら開析した丘陵とは別に、垂水台地からそのまま東へ伸びる丘陵の南縁辺部に北ヶ迫遺跡は立地している。標高約45ｍの丘陵上に立地し、東側には沖積平野が広がり、遠くは海岸線まで一望できる。

北ヶ迫遺跡と同丘陵の北縁裾には、広原横穴群があり、うち１号には人物を描いた線刻壁画が描かれており、出土遺物から８世紀中葉の構築と考えられる。広原横穴群の南東約1.5㎞の微高地上には住吉古墳があり、前方後円墳の１号墳１基のみが残存している。広原横穴群、住吉古墳、後述する「国指定史跡蓮ヶ池横穴群」周辺に分布する横穴群は「住吉村古墳群」として県指定となっている。

北ヶ迫遺跡裾の水田地帯南側には、前田遺跡、前田二月田遺跡が隣接して立地している。前田遺跡では平安時代中期～後期の水田が検出されており、また、６世紀後半の「大足」が溝状遺構内から出土している。前田二月田遺跡では中世の溝状遺構、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を含んだ堆積層が検出されている。

北ヶ迫遺跡より、北東約2.0㎞の標高約５ｍの低地には、保木下遺跡があり、中世の水田遺構、河川跡、溝状遺構が検出され、河川跡からは、大量の弥生土器が出土している。

垂水台地より東へ伸びる開析した丘陵の先端部には６世紀中葉から７世紀代に構築された「国指定史跡蓮ヶ池横穴群」が分布している。現在までに82基が確認されており、近年の宮崎大学の調査では、53号に人物を描いた線刻壁画が描かれていること、12号、53号は、墳丘を伴っていることが新たに確認された。その他、横穴群は垂水台地を基幹とする下北方丘陵に県指

定池内横穴（現存４基）、その西に上北方横穴群（県指定瓜生野村古墳群）が立地している。

また蓮ヶ池横穴群の立地する丘陵には土持氏の居城であった丹後城があり、この他、中世山城には垂水台地を基幹とする下北方丘陵中央部に位置する宮崎城があり、南北朝の乱の際には南朝方の図師六道入道慈円が宮崎城に拠って兵を挙げたのを始まりとし、元和元年（1615）の一国一城令で廃城となるまで、島津氏、高橋氏、伊東氏、有馬氏と城主が替わっている。また、本報告「北ヶ迫遺跡」も『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』Ⅰの中で、山城の可能性が指摘されている。

さらに、先述した下北方丘陵周辺には多くの弥生時代の遺跡、古墳時代の遺跡が分布する。弥生時代では下北方丘陵南端に位置する弥生時代前期末～後期後半の環濠集落が確認された下郷遺跡、その東側裾には弥生時代中期の宮崎大学茶園遺跡、東側低地には竹製の筌や木製の鍬、大板、杭、炭化米の付着した土器が出土している垣下遺跡がある。また、下北方丘陵の東側に広がる水田地帯中央部では弥生時代後期全般の遺構が確認された黒太郎遺跡があり、溝状遺構、周溝状遺構、柱穴群が検出されている。（註１）その他、黒太郎遺跡の東南約1.5㎞の微高地上には弥生時代後期後半遺物の良好な一括史料が得られた赤江町遺跡が所在する。（註２）

古墳時代では下北方丘陵南端部に、下北方古墳群があり、前方後円墳４基、円墳12基、地下式横穴墓９基により構成され、１号墳（指定13号墳）、２号墳（無号墳）より、６世紀初頭の円筒埴輪や形象埴輪が、５号地下式横穴墓からは５世紀後半の金製垂飾付耳飾、玉類、変形獣形鏡、変形文鏡、直刀、剣、鉾、鉄鏃など多くの副葬品が出土しており、また、下北方古墳群の東南部の沖積平野部になる宮崎神宮内には前方後円墳の船塚古墳が所在する。

（註１）　平成11年度報告書刊行予定

（註２）　未報告

〈参考文献〉

児玉幸多　監修　『日本城郭大系16～大分・宮崎・愛媛～』　新人物往来社　1980

『下北方地下式横穴第５号』　宮崎市教育委員会　1977

『宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ』　宮崎市教育委員会　1990

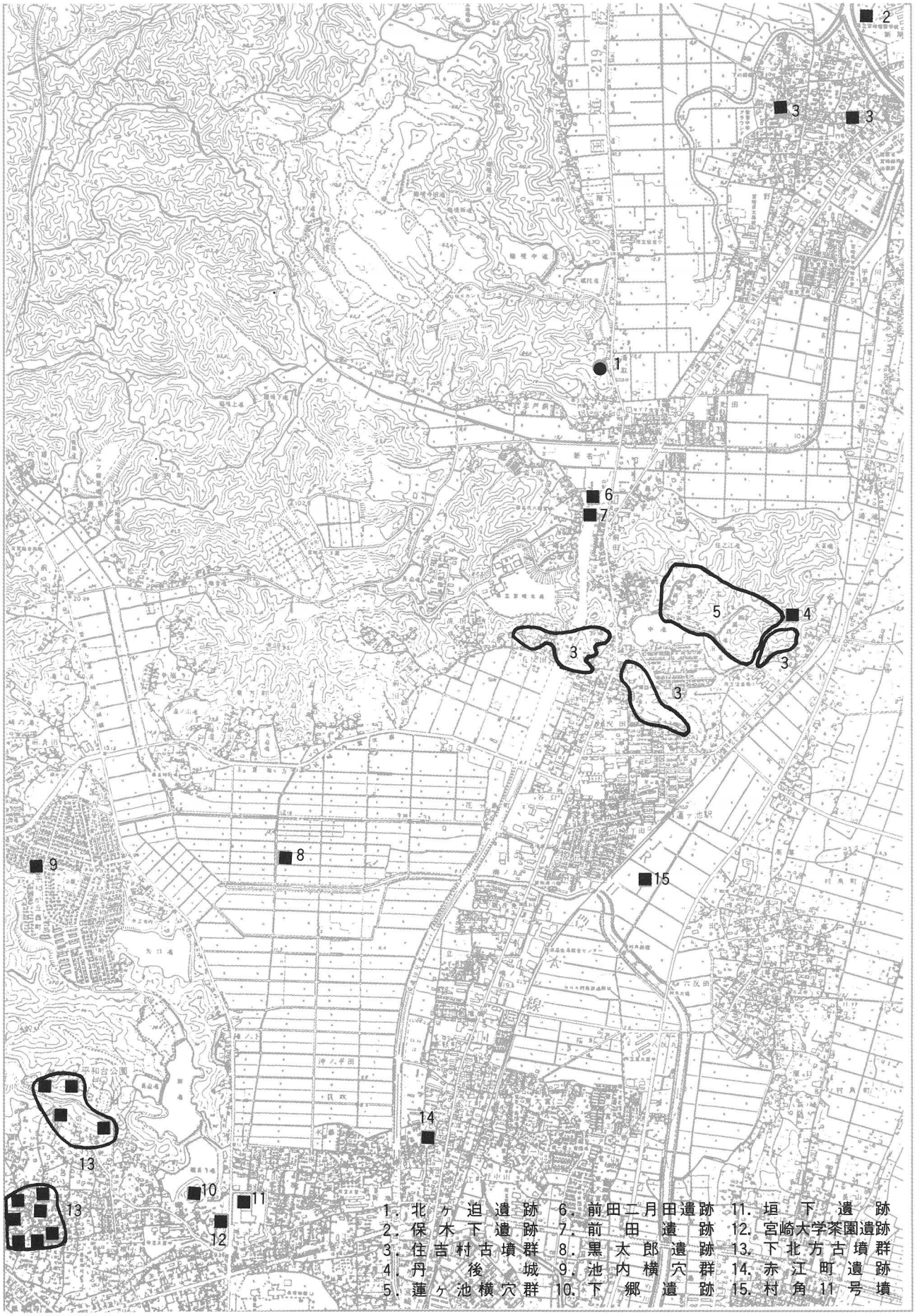
『垣下遺跡』　宮崎市教育委員会　1991

石川悦雄　『日向考古資料Ⅰ』　『研究紀要』　No.10　宮崎県総合博物館　1984

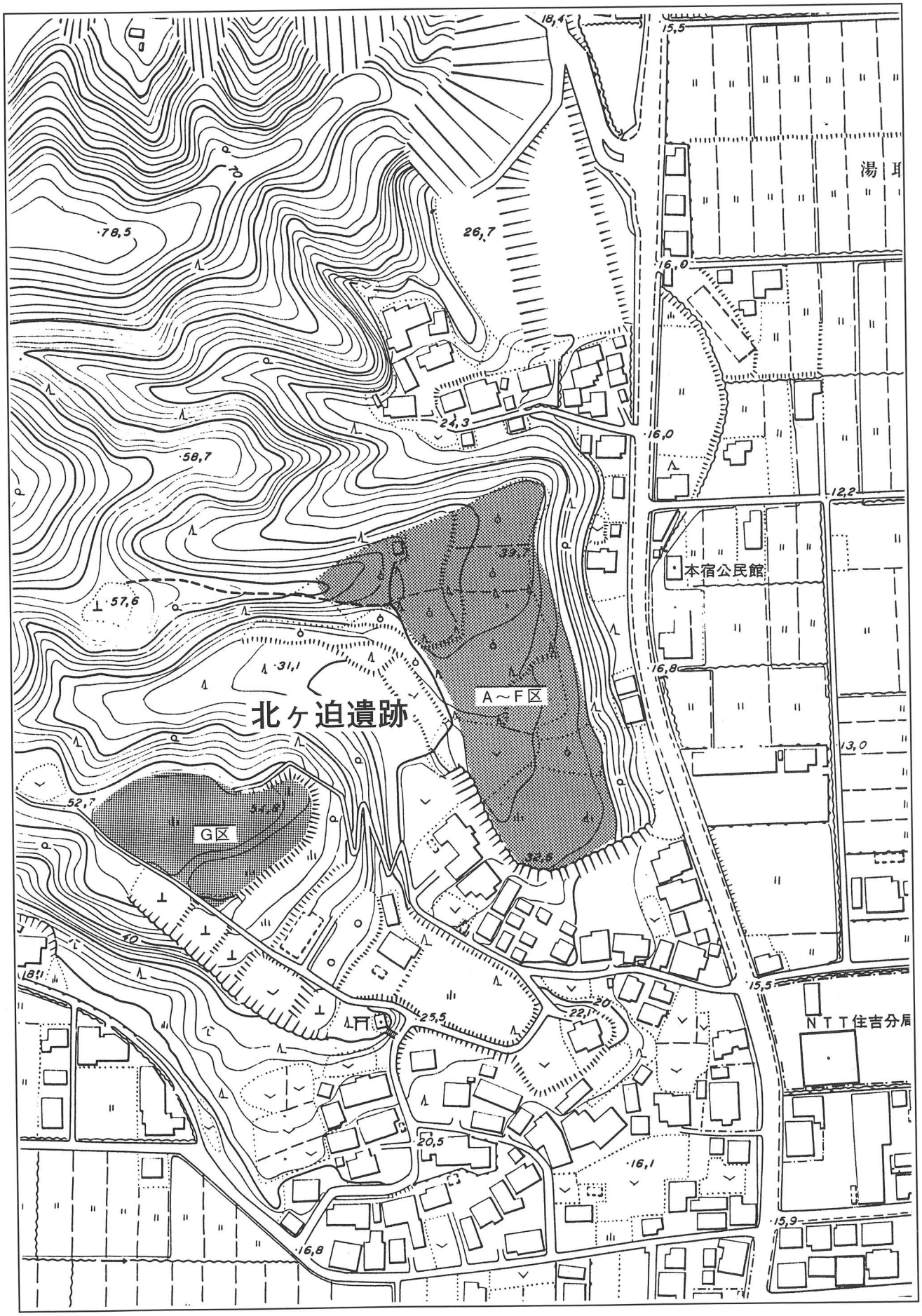
『宮崎県史』　資料編　考古２　1993

『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』Ⅰ　宮崎県教育委員会　1998

『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』Ⅱ　宮崎県教育委員会　1999



第１図　北ヶ迫遺跡位置図（1/25,000）



第２図　北ヶ迫遺跡周辺図（1/2,500）

第Ⅱ章　調査の結果

第１節　調査の概要

北ヶ迫遺跡は宮崎市大字島之内字北ヶ迫6165番外99筆に所在し、発掘調査は平成10年４月22日～平成10年８月11日までの期間実施した。発掘調査以前は、林地、畑地で、それ以前は果樹園であった。現況では土地の造成により地山の削平が著しく、また、表土除去後も調査区全体に果樹作付けの際の掘り込みが地中深くまで入っており、それらの攪乱に悩まされながらの調査となった。

また本遺跡は、第１章でも述べたが、『宮崎県中近世城館緊急分布調査報告書』Ⅰ内で、山城の可能性として指摘されているため、それらも踏まえて調査に当たった。

基本層序

Ⅰ層－　表土

Ⅱ層－　黒褐色土（柔質で、締まる。竪穴住居、掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構、柱穴群検出面）

Ⅲ層－　暗褐色土（柔質で、締まる。）

Ⅳ層－　褐色土（硬質で、締まる。陥穴状遺構検出面）

Ⅴ層－　黄褐色土（非常に硬く締まる。）

Ⅵ層－　黒色土（硬質で、締まる。）

Ⅶ層－　礫層

Ⅷ層－　泥岩層

調査区は便宜上、旧畑の区画に沿って調査区分けした。Ａ～Ｇ区に分割した。

Ａ区の調査（第４図）

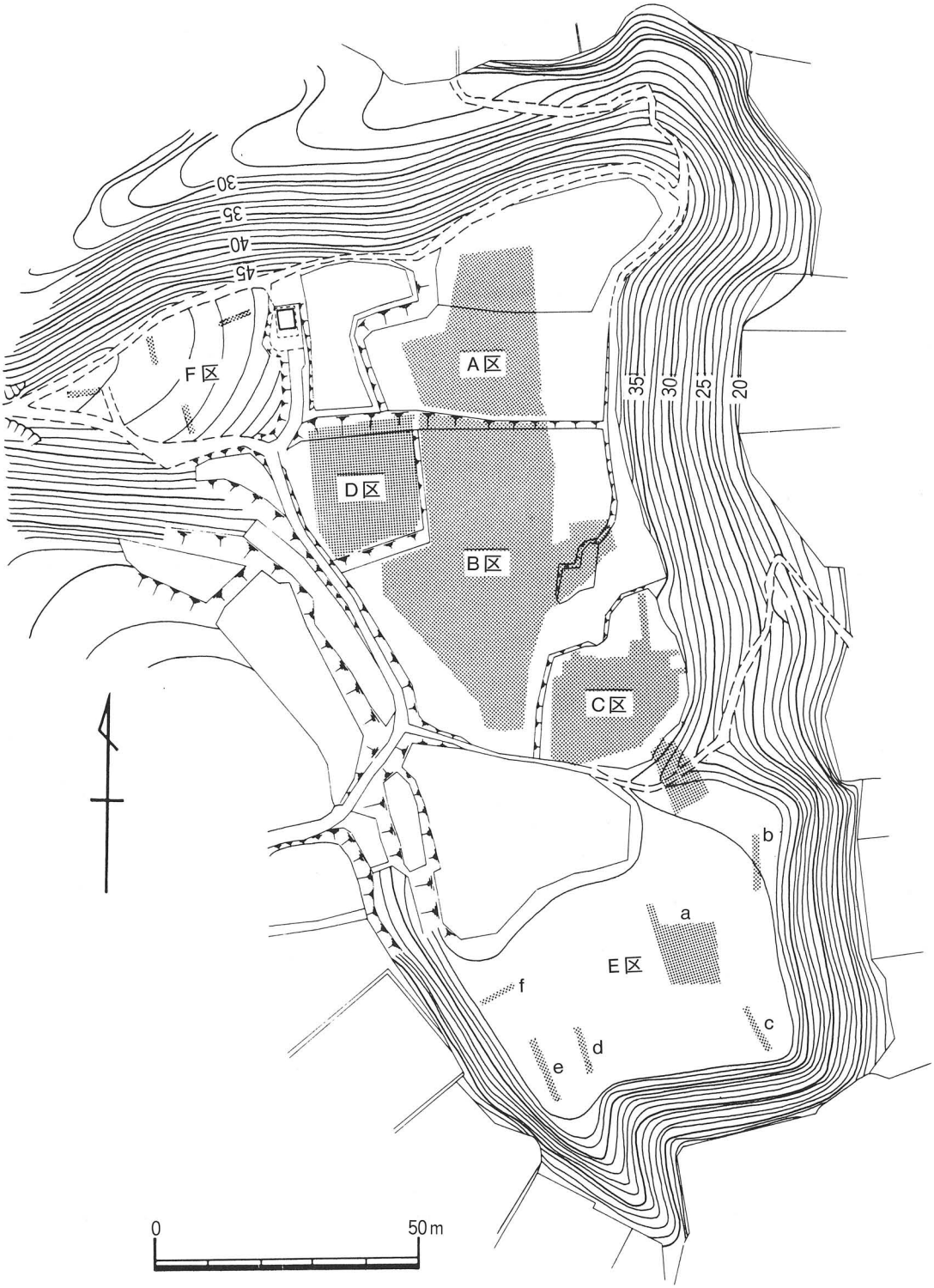
調査区北側、標高約39ｍに立地し、ほぼ平坦になる。表土が10～20㎝と薄く、表土除去後、北半分はⅡ層、南半分ではⅢ層が露出しており、その面で遺構検出を行った。全面調査を実施し、調査の結果、竪穴住居、竪穴状遺構、土坑、溝状遺構、柱穴群、陥穴状遺構が検出された。柱穴群は調査区南側に十数本集中して検出された。

Ｂ区の調査（第５図）

調査区中央部、標高約38.5～36.5ｍに立地し、北から南に向かって傾斜する。表土除去後、北半分はⅡ層、Ⅲ層、南半分ではⅢ層～Ⅵ層が露出しており、その面で遺構検出を行った。全面調査を行い、調査の結果、竪穴住居、竪穴状遺構、掘立柱建物、柵列、土坑、溝状遺構、柱穴群、陥穴状遺構が検出された。柱穴群は調査区北側、南側で多数検出された。

Ｃ区の調査（第６図）

Ｂ区東側、標高約34.5ｍに立地し、ほぼ平坦となる。表土除去後、Ⅳ層～Ⅵ層が露出してお



第３図　北ヶ迫遺跡調査区図（１／1,250）

り、その面で遺構検出を行った。全面調査を実施し、調査の結果、竪穴住居、掘立柱建物、土坑、柱穴群が検出された。柱穴群は調査区北半分で多数検出された。また、調査区南側に位置する掘割り状の谷についても併せて調査を行った。谷部分はトレンチ調査を行い、その結果、道路状遺構が検出された。

D区の調査（第７図）

Ｂ区西側、標高約41.0ｍに立地し、ほぼ平坦となる。表土除去後、Ⅱ層～Ⅴ層が露出しており、その面で遺構検出を行った。全面調査を実施し、調査の結果、掘立柱建物、土坑、柱穴群、溝状遺構が検出された。柱穴群は調査区北半分で多数検出された。

Ｅ区の調査（第３・８図）

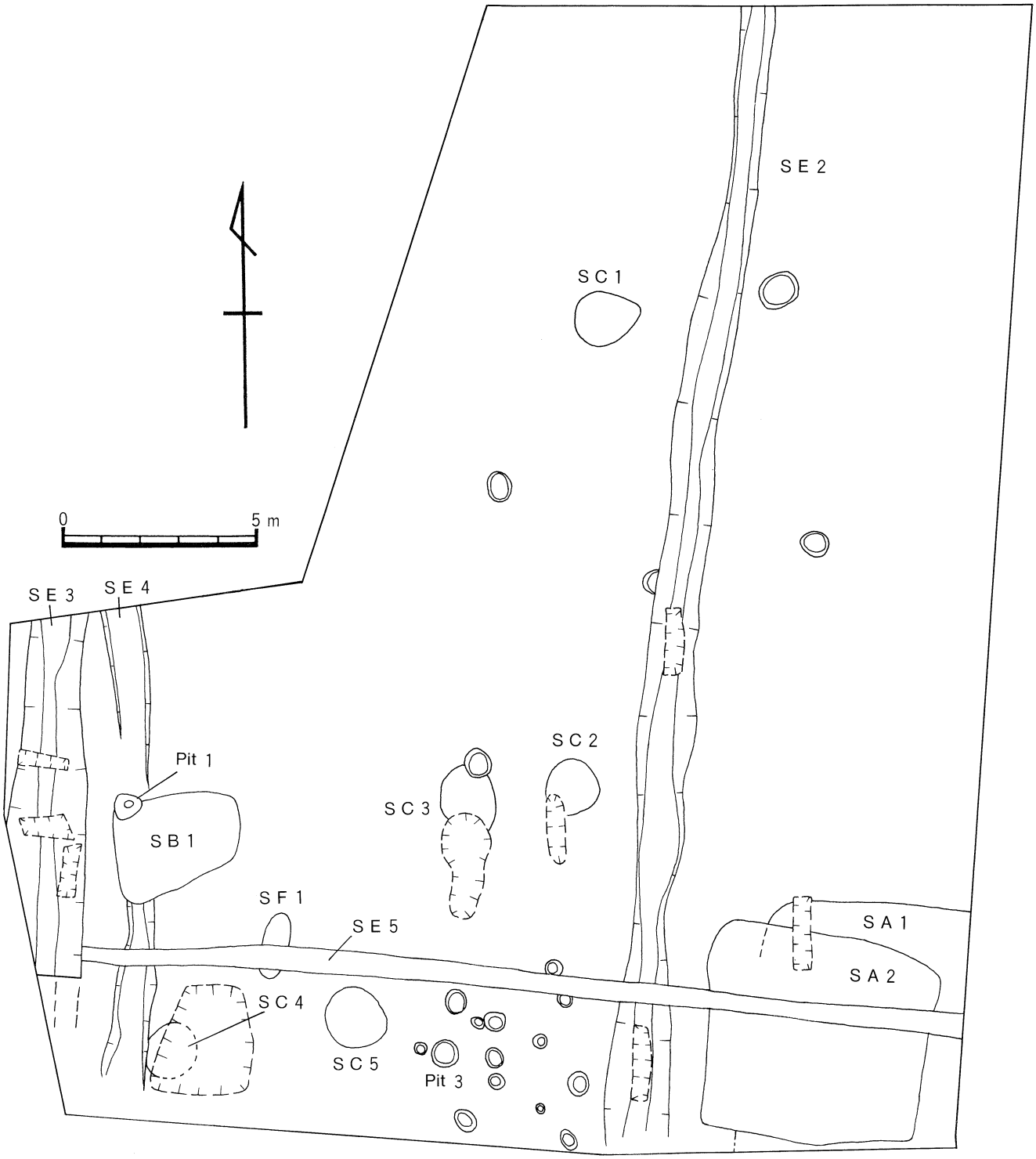
調査区南側、標高35.5～33.3ｍに立地し、北から南に緩やかに傾斜する。Ｅ区については、宅地開発後は、公園用地として予定されており、地下の遺構破壊が行われないと考えられるため、トレンチ調査にとどめた。トレンチを合計６本設定し、遺構の確認されたＥａのみ、６×６ｍにトレンチの拡張を行った。表土除去後、Ⅶ層が露出しており、その面で遺構検出を行った。調査の結果、掘立柱建物と柱穴群が検出され、柱穴群はトレンチ内全体に広がる。またそれ以外のトレンチでは、遺構遺物は確認されなかった。

Ｆ区の調査（第３図）

調査区北西部、標高約48.5～45.0ｍに立地し、西から東へ傾斜する。トレンチ調査を行い、合計で４本設定した。表土除去後、Ⅷ層が露出しており、調査の結果、遺物、遺構は確認されなかった。

Ｇ区の調査（第２図）

Ａ～Ｆ区と谷を挟んだ西側の丘陵で標高約55.0ｍに立地し、ほぼ平坦となる。トレンチ調査を行い、合計で10本設定した。表土除去後、Ⅷ層が露出しており、調査の結果、遺物、遺構は確認されなかった。



第４図　Ａ区遺構配置図（１／150）

第５図　Ｂ区遺構配置図（１／150）

SD1
SA7
Pit12
Pit10
SS 3
Pit11
SS 2
SC21
ST 2
ST 3
Pit 9
SC20
33,300m
SD1土層断面
0
5 m

第6図　C区遺構配置図

第２節　遺構と遺物

(1)　遺構

１号竪穴住居（第９図）

Ａ区南側の東寄りで検出された。南北6.0ｍ以上、東西5.0ｍ以上、壁高24㎝を測り、南壁西寄りで竈を付設し、住居中央部で埋甕炉を検出した。５号溝状遺構は、６号溝状遺構に切られ、２号竪穴住居を切る。主柱穴はＰ１～４の４本で、床面からの深さは、Ｐ１が40㎝、Ｐ２が55㎝、Ｐ３が50㎝、Ｐ４が46㎝を測る。埋甕炉は甑を用いており、竈は袖部が僅か高さ５㎝残るのみで検出された。

遺物は埋甕炉に用いた甑の他、土師器のほぼ床面の高さから甕、埦、支脚が破片の状態で出土し、また竈付近から、須恵器の坏蓋が完形で２点出土した。

２号竪穴住居（第９図）

Ａ区南側の東寄りで検出された。南北5.9ｍ、北壁5.6ｍ、南壁5.1ｍ、壁高46㎝を測り、台形プランを呈し、住居中央部で埋甕炉を検出した。５号溝状遺構、１号竪穴住居に切られる。主柱穴はＰ５～８の４本で、床面からの深さは、Ｐ５が46㎝、Ｐ６が57㎝、Ｐ７が45㎝、Ｐ８が48㎝を測る。遺物は、埋甕炉に用いた土師器の甕の他、甑の破片、鉄鏃が床面からやや浮いた位置で出土している。

３号竪穴住居（第10図）

Ｂ区北側の東寄りで検出された。南北4.0ｍ、東西4.3ｍ、壁高18㎝を測り、不定形プランを呈し、南壁中央部よりやや東で竈を付設し、住居中央部で埋甕炉を検出した。４号竪穴住居、22号土坑を切る。住居内で柱穴を数基検出したが、明確な主柱穴は確認されなかった。竈は袖部が僅か高さ５㎝残るのみで検出された。

遺物は、埋甕炉に用いた甕の他、土師器の甕、高坏、坏蓋、須恵器の坏身が破片で、床面からやや浮いた位置で出土し、特に住居中央より西側に集中した。

４号竪穴住居（第10図）

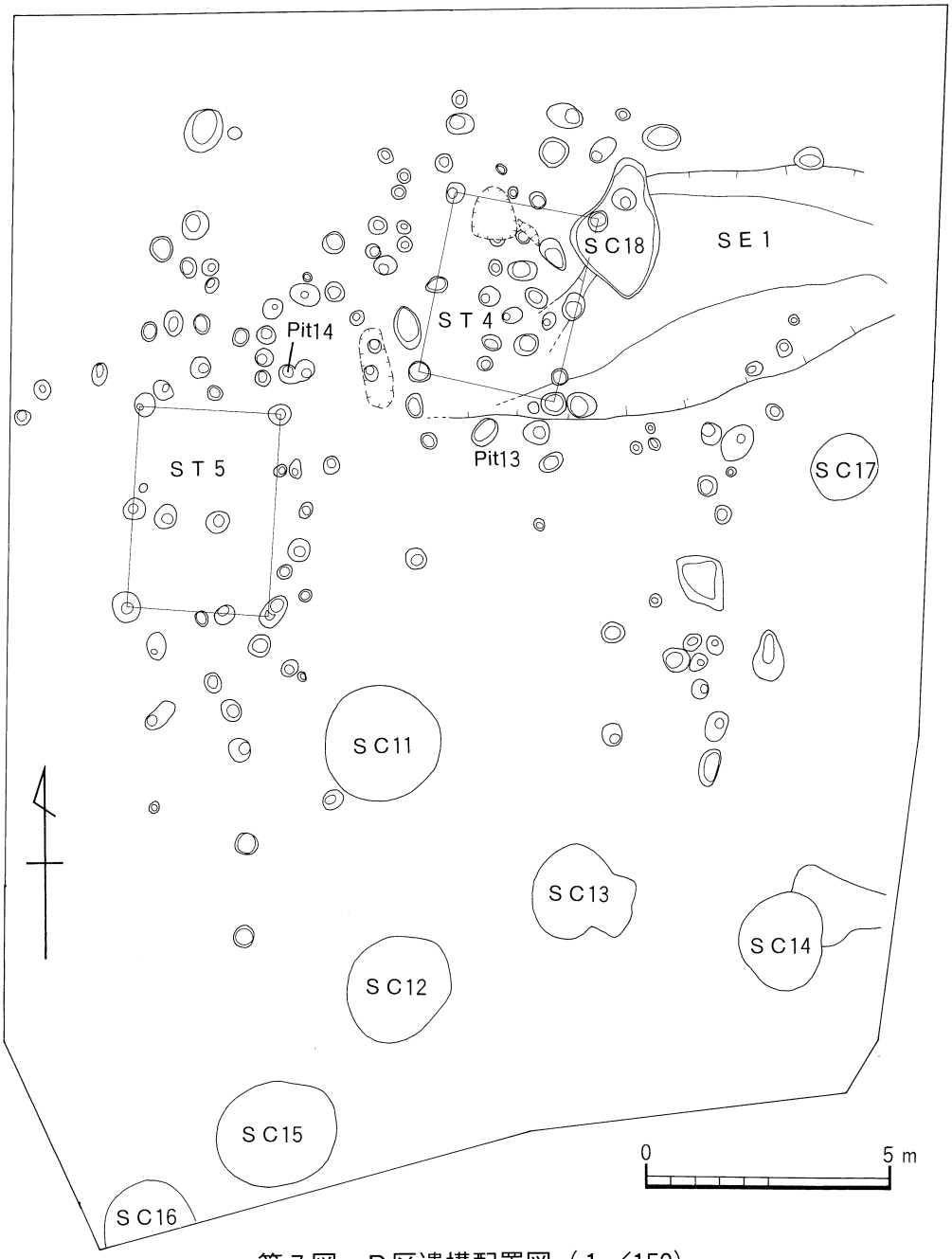
Ｂ区北側の東寄りで検出された。南北4.0ｍ、東西3.0ｍ以上、壁高10㎝を測る。３号竪穴住居に切られる。主柱穴は４本と考えられるが、Ｐ１～３の３本のみの検出で、床面からの深さは、Ｐ１が20㎝、Ｐ２が20㎝、Ｐ３が28㎝を測る。

遺物は埋土中から土師器の小破片が数点出土したのみである。

５号竪穴住居（第10図）

Ｂ区北側の中央で検出された。南北4.5ｍ、北壁4.9ｍ、南壁4.4ｍ、壁高12㎝を測り、台形プランを呈する。貼床を施し、住居中央部から南寄りの位置で埋甕炉を検出した。10号土坑と切り合い、また住居東壁北寄りで、貼床と埋甕炉のみ残る住居に切られる。主柱穴は４本と考えられるが、Ｐ１、２の２本のみの検出で、床面からの深さはＰ１が50㎝、Ｐ２が55㎝を測る。

遺物は、埋甕炉に用いた甕の他、土師器の甕、須恵器の坏蓋、坏身が破片で、床面からやや



第７図　Ｄ区遺構配置図（１／150）

浮いた位置で出土した。

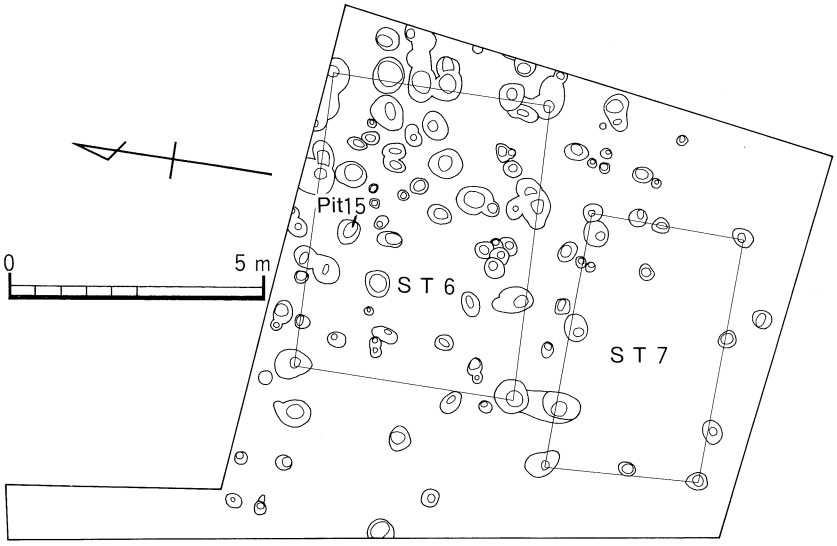
６号竪穴住居（第11図）

Ｂ区中央部で検出された。南北4.3ｍ、東西4.3ｍ、壁高12㎝を測り、方形プランを呈する。主柱穴はＰ１～４の４本と考えられるが、Ｐ１～３の３本のみの検出で、残りは攪乱によって消滅したと考えられ、床面からの深さはＰ１が49㎝、Ｐ２が40㎝、Ｐ３が33㎝を測る。

遺物は、埋甕炉に用いた甕の他、土師器の高坏、支脚等の破片が、ほぼ床面の高さから数点出土した。

７号竪穴住居（第11図）

Ｃ区東側で検出された。南北4.5ｍ、東西3.9ｍ以上、壁高30㎝を測り、西壁北半分で南北



第８図　Ｅ区遺構配置図（１／150）

2.5ｍ、東西0.6ｍの住居本体より20㎝床面の高い突出部を付設する。住居中央部よりやや南側で埋甕炉を検出した。主柱穴はＰ１～４の４本で、床面からの深さは、Ｐ１が45㎝、Ｐ２が48㎝、Ｐ３が38㎝、Ｐ４が30㎝を測る。

遺物は、埋甕炉に用いた甕の他、土師器の皿、土錘、紡錘車、須恵器の坏蓋の破片、石包丁が床面からやや浮いた位置で出土した。

１号竪穴状遺構（第12図）

Ａ区南側で検出された。東西3.1ｍ、東壁西1.5ｍ、西壁2.1ｍ、壁高14㎝を測り、隅丸台形プランを呈する。柱穴は確認されなかった。

遺物は弥生土器の甕の破片、砥石が床面からやや浮いた位置で出土した。

２号竪穴状遺構（第12図）

Ｂ区北側東寄りで検出された。南北2.8ｍ、東西3.5ｍ以上、壁高12㎝を測り、隅丸長方形プランを呈する。主柱穴が２本確認され、床面からの深さはＰ１が37㎝、Ｐ２が32㎝を測る。

遺物は、土師器片、須恵器片が少量出土した他、拳大の円礫が散在して出土した。

３号竪穴状遺構（第５図）

Ｂ区北側西寄りで検出された。南北5.0ｍ、東西1.8ｍ以上、壁高17㎝を測り、柱穴は確認されなかった。

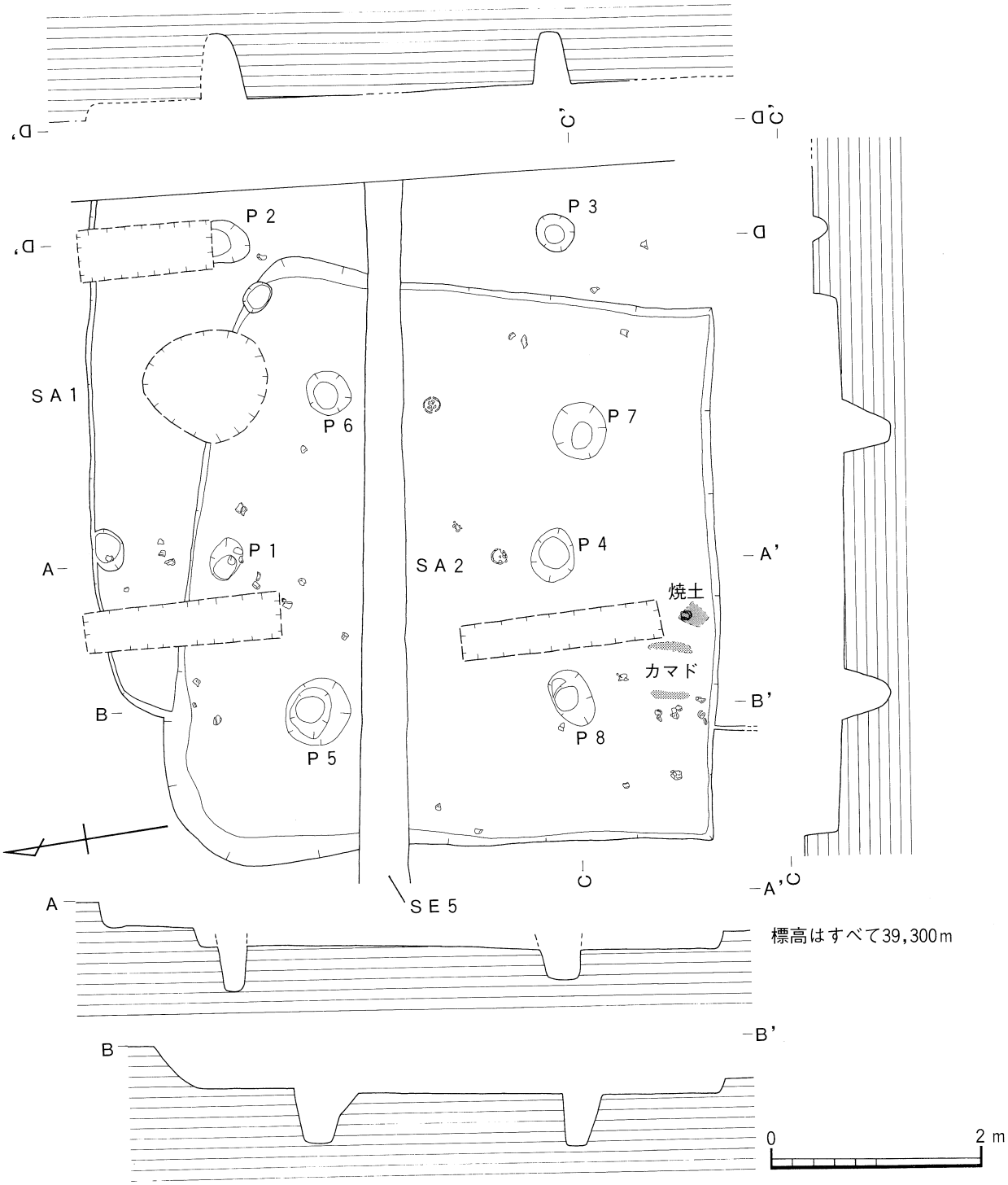
遺物は、弥生土器片、須恵器片が数点出土したのみである。

１号掘立柱建物（第13図）

Ｂ区北側西寄りで検出された。梁行２間（4.5ｍ）、桁行２間（5.03ｍ）、深さ59～104㎝を測る。また西辺で梁行１間（1.93ｍ）、桁行２間（3.05ｍ）の突出部を付設する。１号溝状遺構を切り、またＰ10が10号土坑を切る。棟方向はＮ83°Ｗである。

遺物は、Ｐ４、Ｐ６、Ｐ９、Ｐ10から流れ込みと考えられる弥生土器が数点出土した。

２号掘立柱建物（第14図）



第９図　１・２号竪穴住居実測図（１／60）

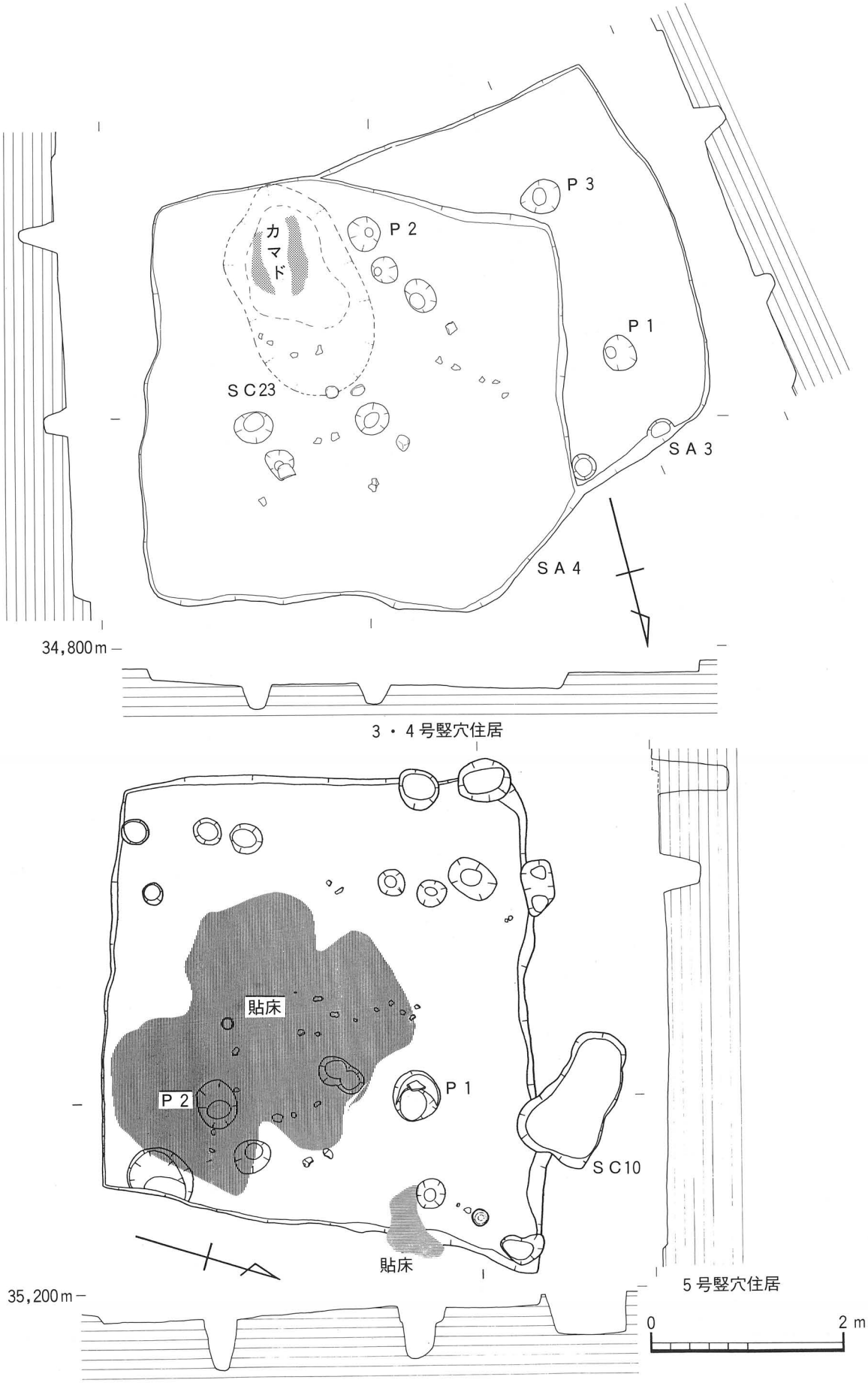
Ｃ区西側北寄りで検出された。梁行２間（2.95m）、桁行２間（4.20m）、深さ60～90cmを測る。棟方向はN78°Wである。

遺物は出土しなかった。

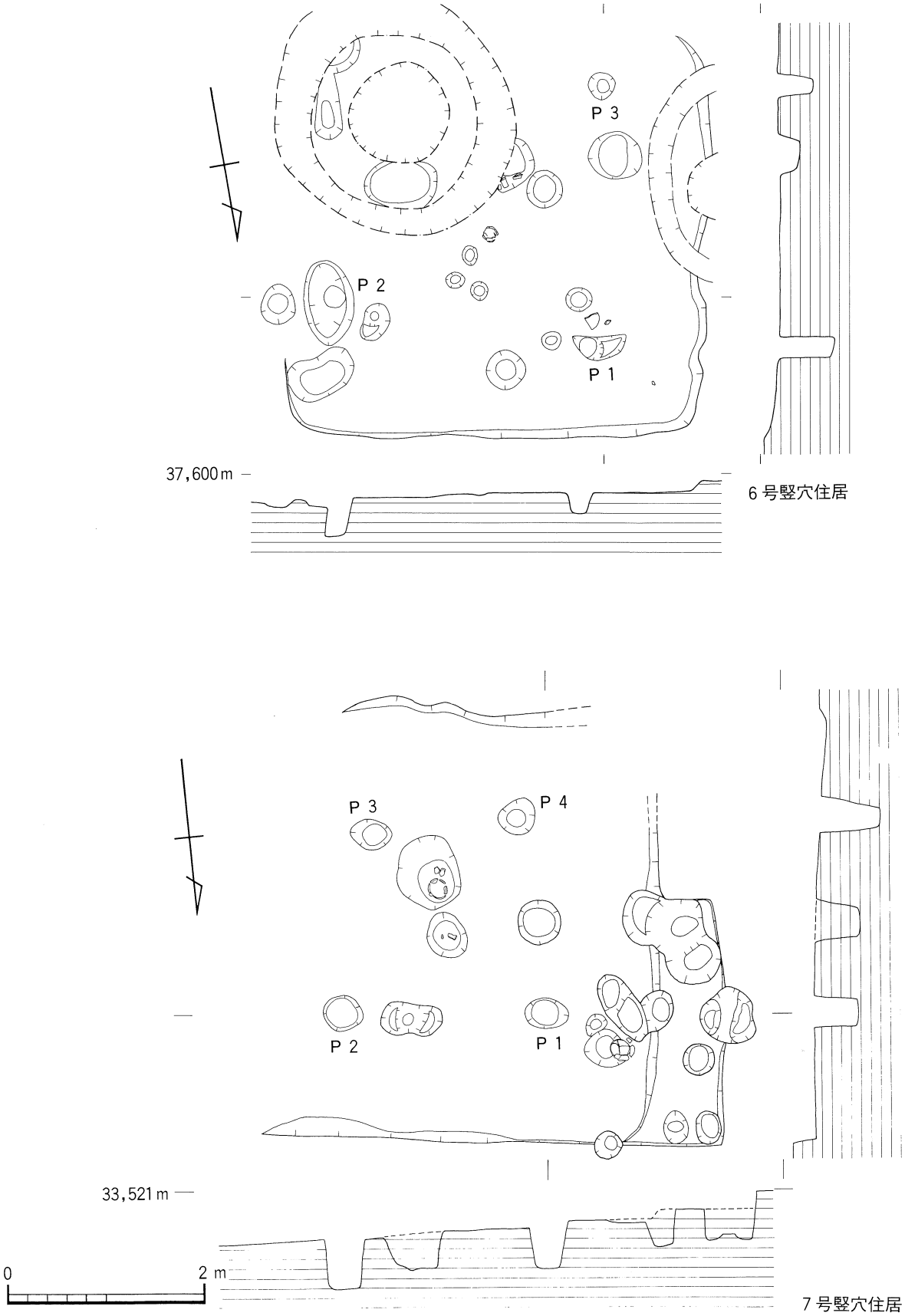
３号掘立柱建物（第14図）

Ｃ区西側南寄りで検出された。梁行２間（3.25m）、桁行３間（3.90m）、深さ35～65cmを測る。棟方向はN75°Wである。

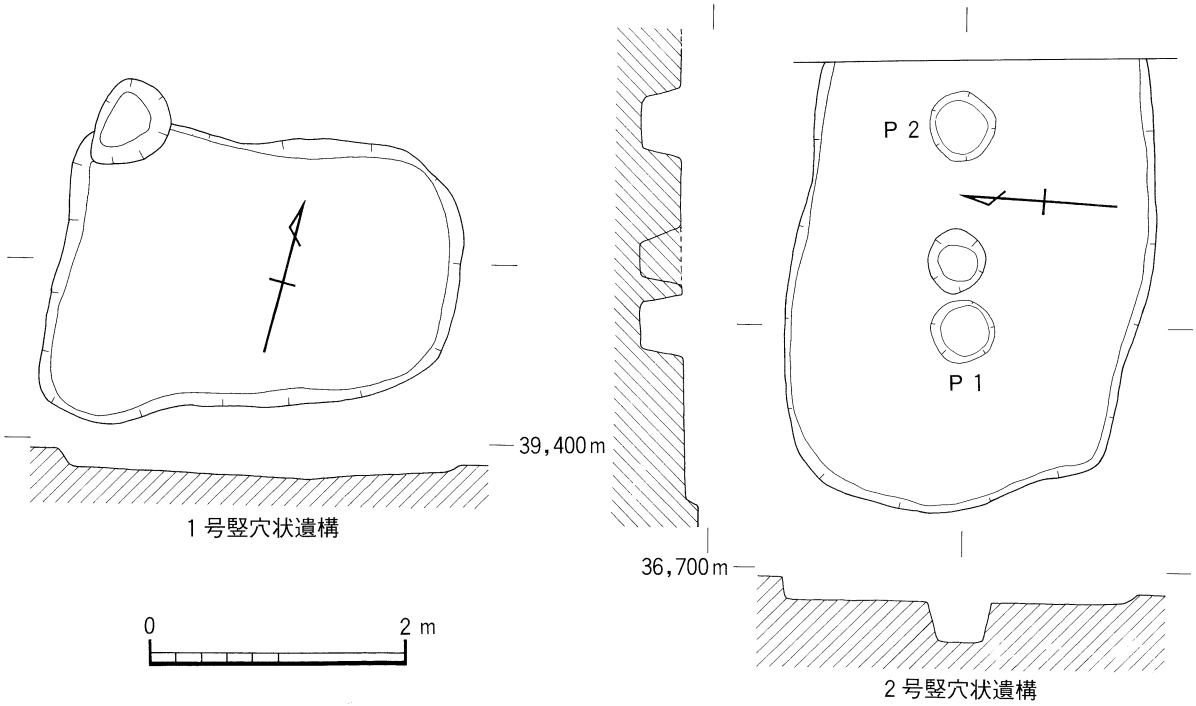
遺物は出土しなかった。



第10図　3～5号竪穴住居、10・23号土坑実測図（1／60）



第11図　6・7号竪穴住居実測図（1／60）



第12図　1・2号竪穴状遺構実測図（1／60）

4号掘立柱建物（第15図）

D区北側中央で検出された。梁行1間（3.03m）、桁行2間（3.70m）、深さ45～74cmを測る。12号土坑に切られる。棟方向はN16°Eである。

遺物は出土しなかった。

5号掘立柱建物（第15図）

D区西側中央で検出された。梁行1間（2.88m）、桁行2間（4.15m）、深さ53～94cmを測る。棟方向はN3°Eである。

遺物は出土しなかった。

6号掘立柱建物（第16図）

E区北側で検出された。梁行2間（4.40m）、桁行3間（5.85m）、深さ58～104cmを測る。棟方向はN88°Eである。

遺物は出土しなかった。

7号掘立柱建物（第17図）

E区南側で検出された。梁行2間（3.08m）、桁行3間（4.85m）、深さ15～90cmを測る。棟方向はN90°Eである。

遺物は出土しなかった。

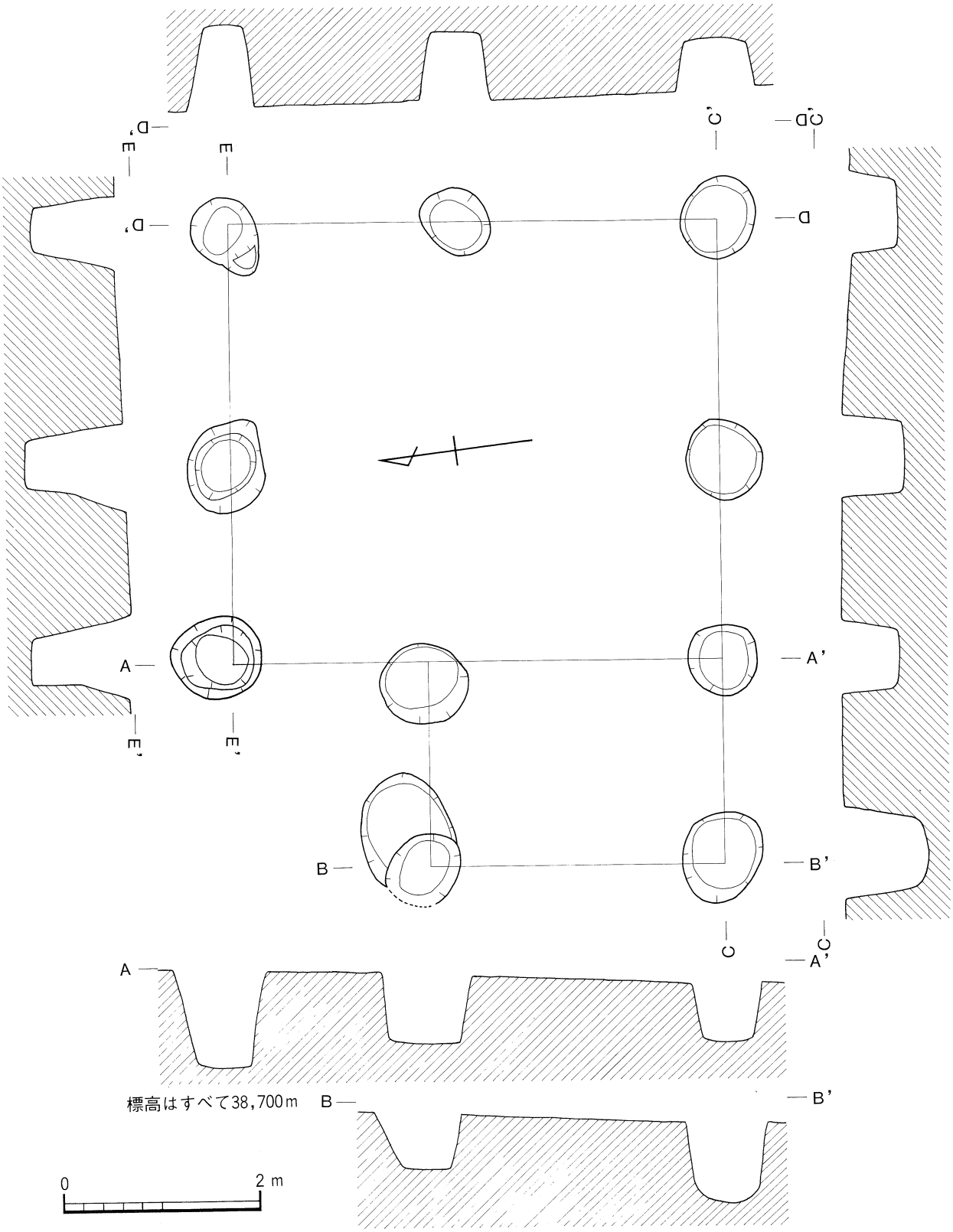
8号掘立柱建物（第17図）

B区南側で検出された。梁行1間（2.05m）、桁行2間（4.34m）、深さ30～65cmを測る。棟方向はN5°Eである。

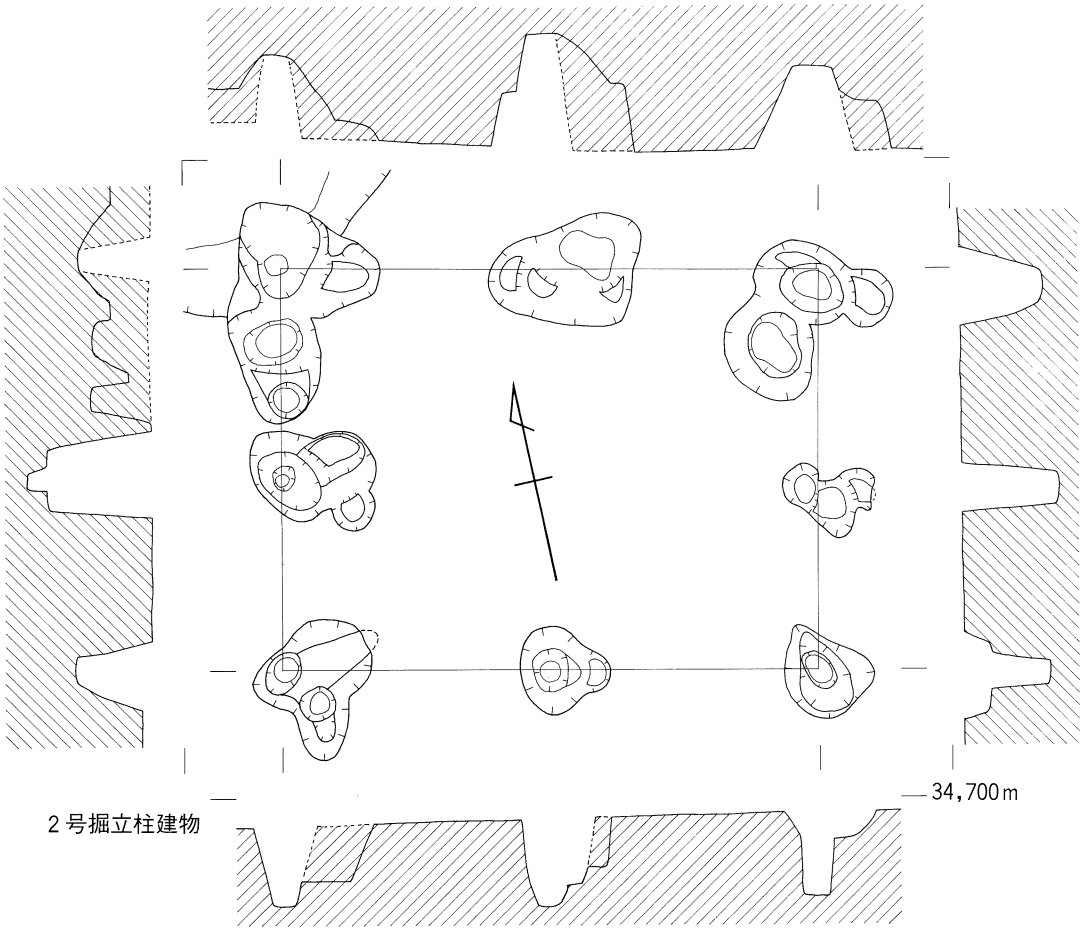
遺物は出土しなかった。

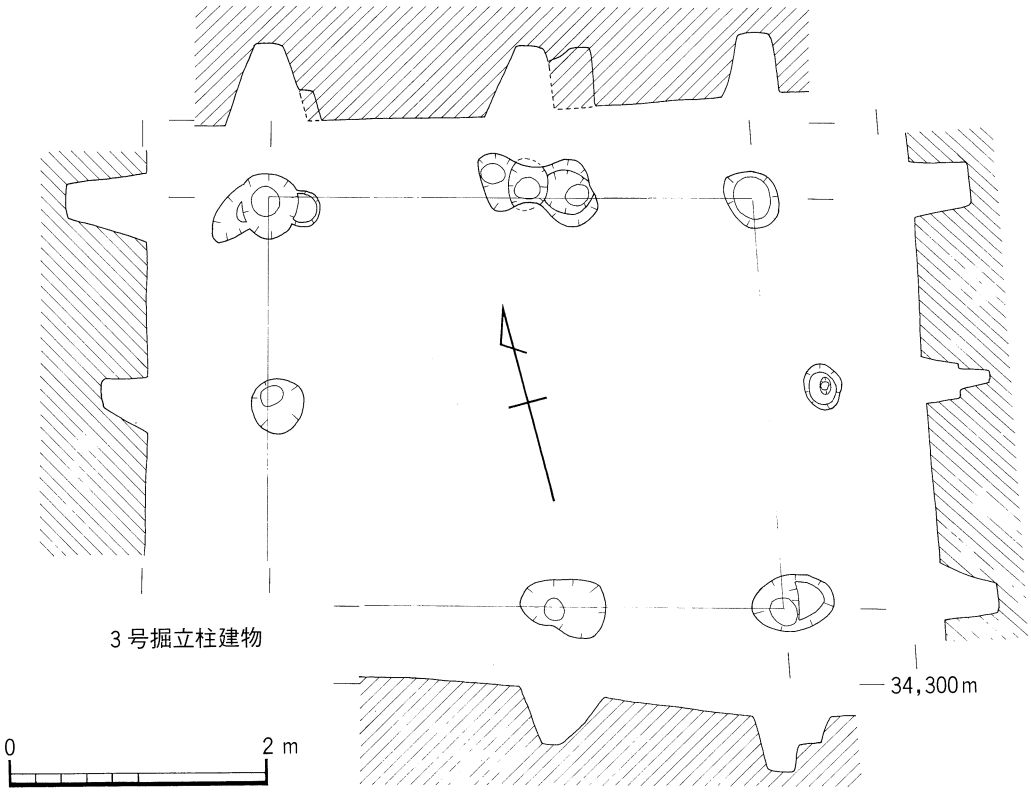
1号柵列（第17図）

B区北側西寄りで検出された。遺存柱穴4本、総延長6.0m、柱穴間1.9～2.0m、深さ59～

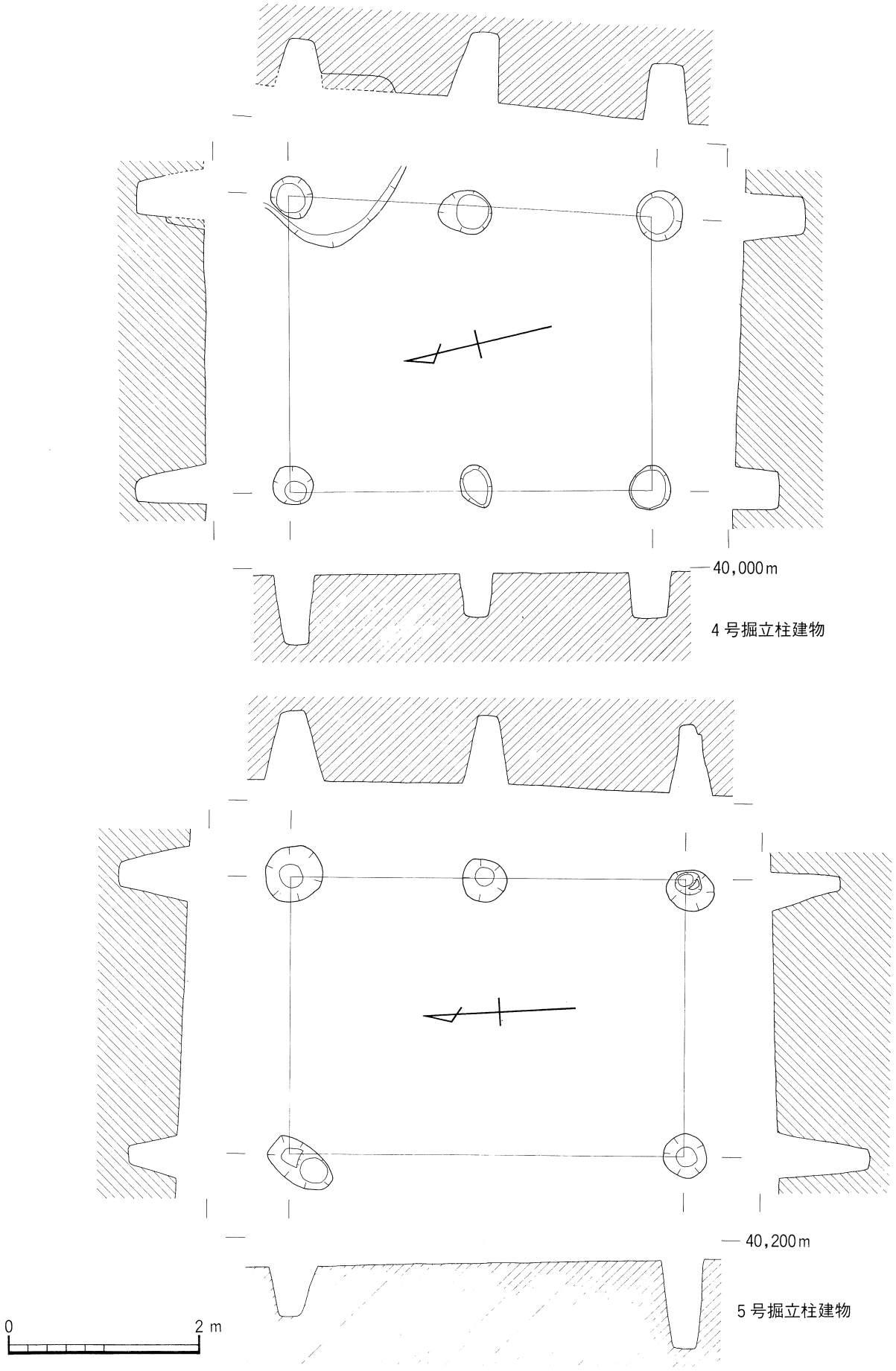


第13図　1号掘立柱建物実測図（1／60）

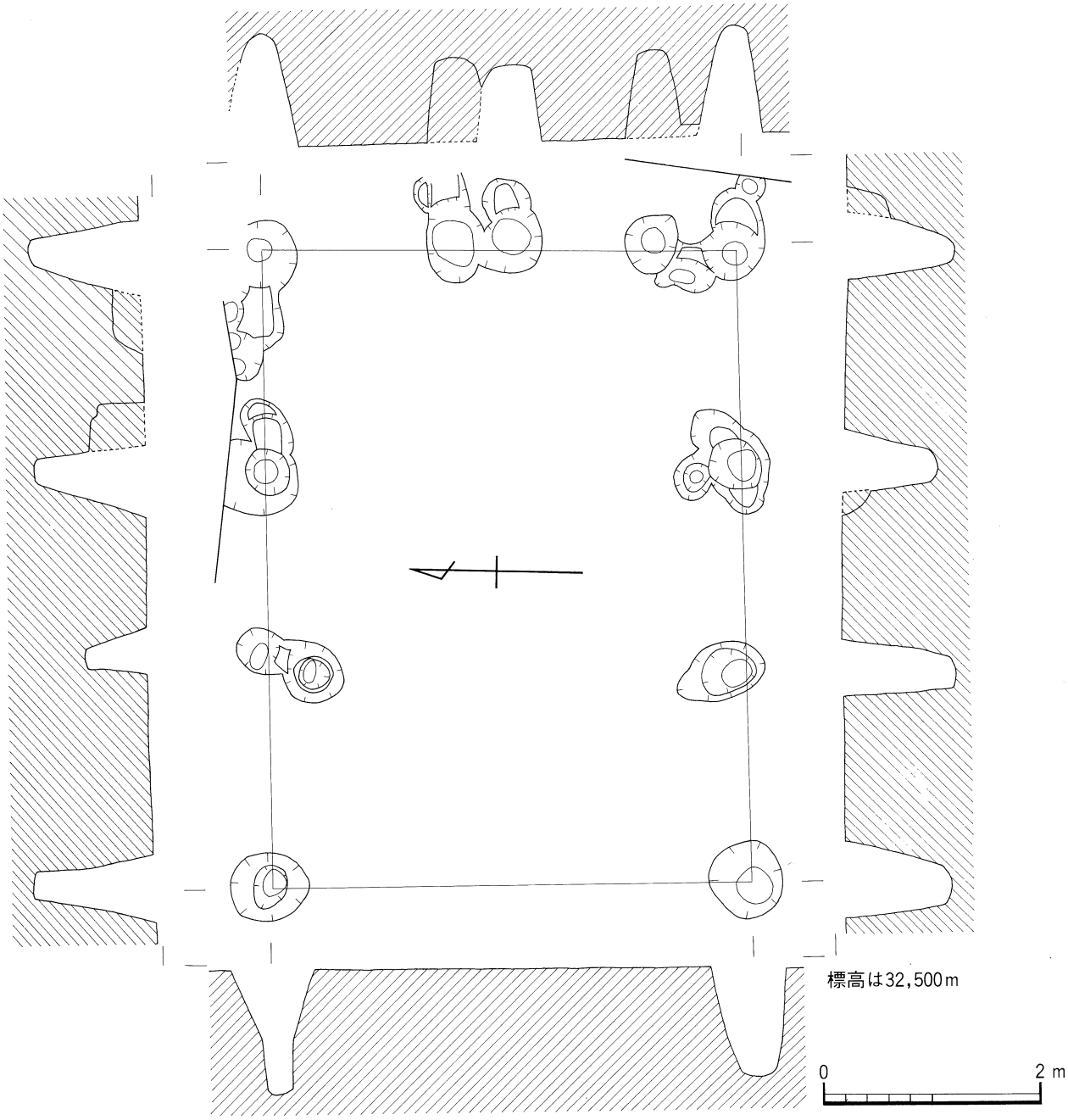




第14図　2・3号掘立柱建物実測図（1／60）



第15図　4・5号掘立柱建物実測図（1／60）



第16図　6号掘立柱建物実測図（1／60）

70cmを測る。1号掘立柱建物北辺に平行して巡る為、1号掘立柱建物に伴う施設と考えられる。

遺物は、P3でキセルが埋土中位で出土した。

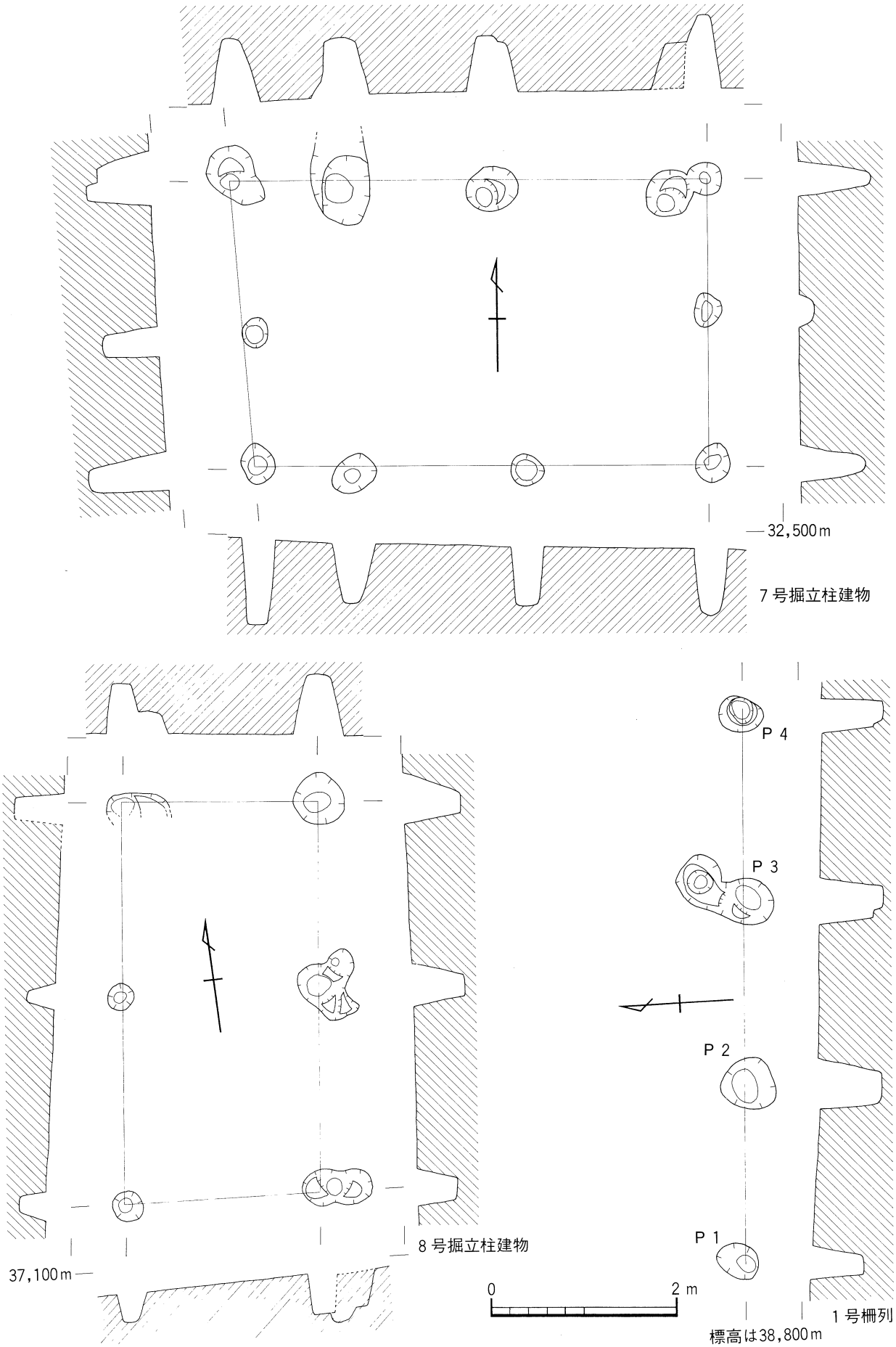
2・3号柵列（第18図）

C区北側で、東西方向に巡る状態で検出された。2号柵列は、遺存柱穴5本、総延長7.4m、柱穴間1.60～2.25m、深さ51～88cm、3号柵列は、遺存柱穴5本、総延長6.9m、柱穴間1.35～2.00m、深さ51～88cm、2柵列合わせての総延長は16.5mを測る。

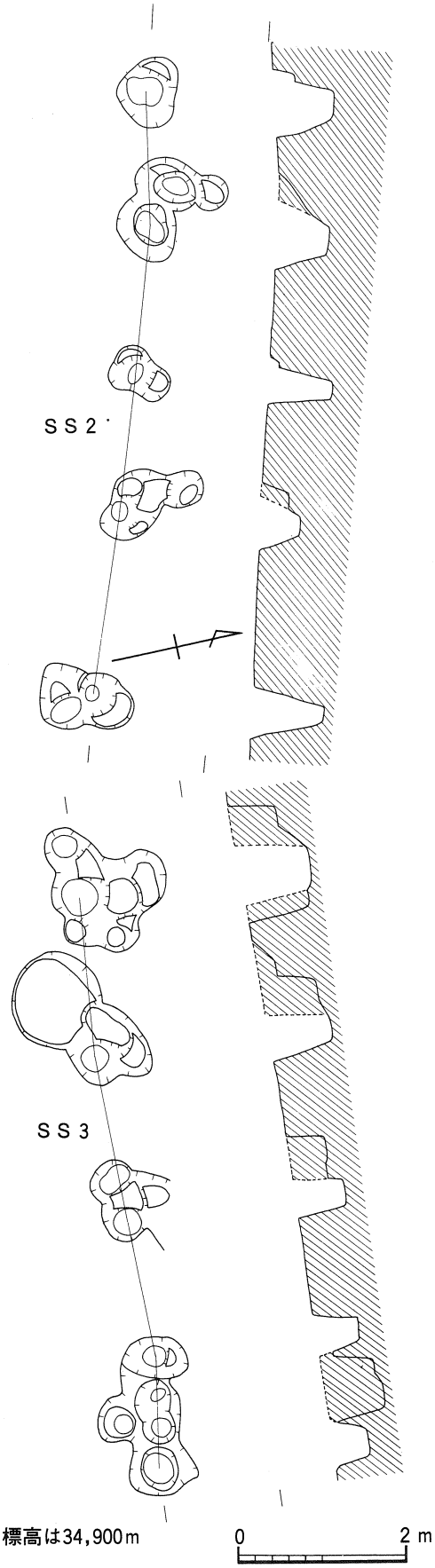
遺物は出土しなかった。

1号土坑（第19図）

A区北側で検出された。南北1.3m、東西2.0m、深さ140cmを測り、円形プランを基調とす



第17図　7・8号掘立柱建物、1号柵列実測図（1／60）



第18図　2・3号柵列実測図
（1／80）

るが、東側で一部突出し、内部は東側を除いて底面に向かって膨らみを持ち、底面は僅かに起伏が有る。

遺物は埋土中位以下で、弥生土器の甕、壺の破片が出土した。

2号土坑（第19図）

A区中央で検出された。直径2.6m、深さ32cmを測り、円形プランを呈し、断面形はビーカー形を呈し、底面は僅かに起伏が有る。

遺物は床面の高さで、弥生土器の甕の破片が数十点出土した。

3号土坑（第4図）

A区中央で検出された。直径2.6m、深さ32cmを測り、円形プランを呈し、断面形はビーカー形を呈し、底面は僅かに起伏が有る。

遺物は床面の高さで、縄文土器の破片が床よりやや浮いた位置で、数点出土した。

4号土坑（第19図）

A区南側西寄りで検出された。直径1.3m、深さ160cmを測り、円形プランを呈し、内部は中位でくびれ、以下は底面に向かって膨らみを持つ。底面は平坦である。

遺物は埋土中から、弥生土器の小破片が僅かに出土したのみである。

5号土坑（第19図）

A区南側中央で検出された。直径1.5m、深さ58cmを測り、円形プランを呈し、断面形はビーカー形を呈し、底面は中央からやや南側の位置で起伏が有る。

遺物は東側底面の高さから、弥生土器の甕が多数出土した。

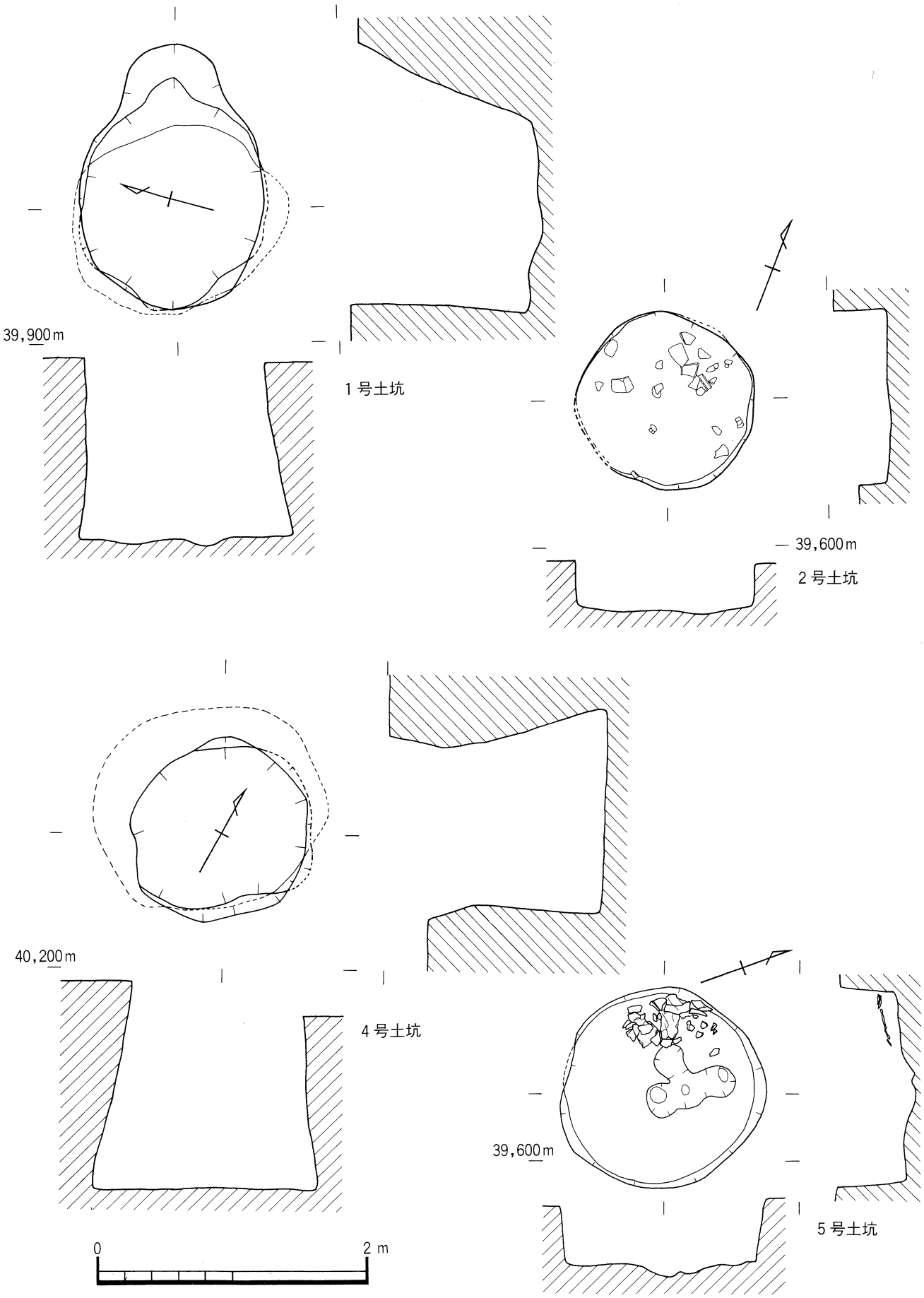
6号土坑（第20図）

B区北側西寄りで検出された。直径1.5m、深さ48cmを測り、円形プランを呈し、断面形はビーカー形を呈し、底面は僅かに起伏が有る。

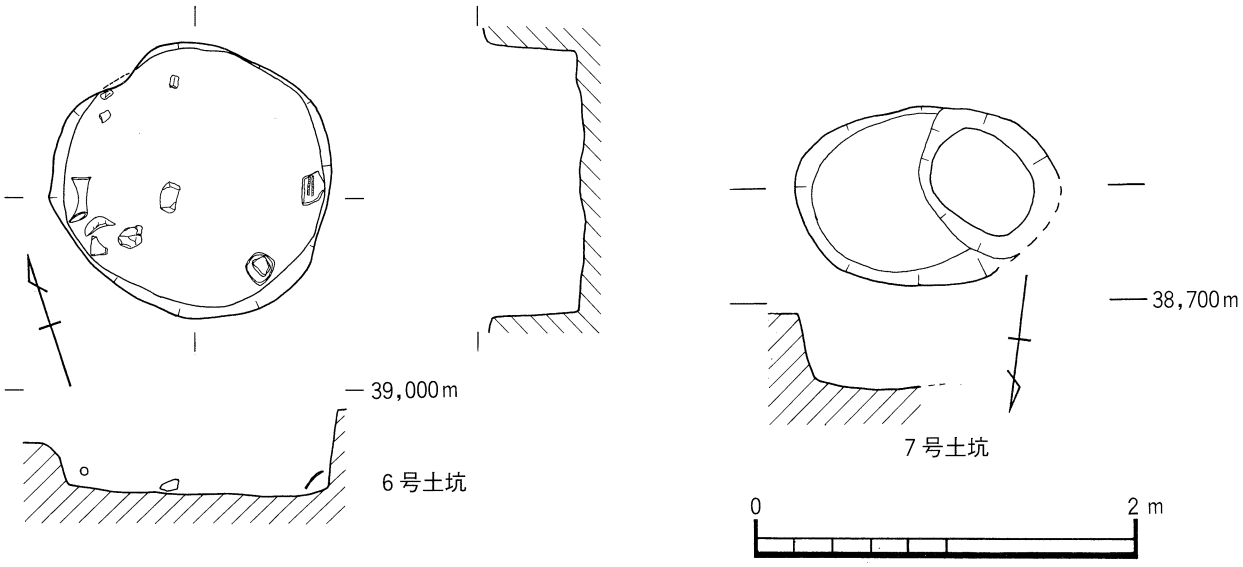
遺物は底面の高さから、弥生土器の甕、鉢、高坏が出土した。

7号土坑（第20図）

B区北側西寄りで検出された。南北0.9m、東西1.0m



第19図　1・2・4・5号土坑実測図（1／40）



第20図　6・7号土坑実測図（1／40）

以上、深さ40cmを測り、西側で、1号掘立柱建物のP10に切られる。

遺物は埋土上位より、弥生土器の甕の破片が出土した。

8号土坑（第21図）

B区北側中央で検出された。長軸2.2m、短軸1.8m、深さ70cmを測り、楕円形プランを呈する。9号土坑を切る。

遺物は埋土上位より、土師器の甕、甑、埦の破片が僅かに出土している。

9号土坑（第21図）

B区北側中央で検出された。長軸2.1m、短軸1.6m、深さ100cmを測り、楕円形プランを呈し、断面形は擂鉢形を呈する。

遺物は出土しなかった。

10号土坑（第10図）

B区北側中央で検出された。長軸1.4m、短軸0.6m、深さ42cmを測る。

遺物は埋土上位より、土師器の小破片が僅かに出土している。

11号土坑（第21図）

D区中央で検出された。南北2.2m、東西2.1m、深さ120cmを測り、円形プランを呈し、内部は、東側中位で幅20cmのテラスを持ち、東側を除いて底面に向かって膨らみを持ち、底面は僅かに起伏が有る。

遺物は埋土上位で、弥生土器の甕、壺の破片が大量に出土した。

12号土坑（第21図）

D区南側中央で検出された。南北2.0m、東西2.1m、深さ110cmを測り、円形プランを呈し、内部は北側から西側にかけて底面に向かって膨らみを持ち、底面は平坦である。

遺物は埋土上位で、弥生土器の甕、壺の破片が大量に出土した。

13号土坑（第21図）

D区南側中央で検出された。南北1.9m、東西2.4m、深さ150cmを測り、楕円形プランを基

調とするが、東側で突出部を持つ。内部は東側の突出部で上場から50㎝の位置で幅40㎝のテラスを持ち、それ以外の部分は底面に向かって膨らみを持ち、底面は平坦である。

遺物は埋土中から弥生土器の甕の破片が出土している。

14号土坑（第21図）

D区南側東寄りで検出された。長軸2.4m、短軸1.9m、深さ135㎝を測り、楕円形プランを基調とするが、北東側で突出部を持つ。内部は北東側の突出部で上場から50㎝の位置で幅50㎝のテラスを持ち、それ以外の部分は底面に向かって膨らみを持ち、底面は平坦になるが、2本の柱穴が確認された。底面からの深さが共に40㎝、柱穴間が1.4mを測る。

遺物は埋土中から弥生土器の甕、壺の破片が大量に出土している。

15号土坑（第22図）

D区南側中央で検出された。南北2.2m、東西2.5m、深さ90㎝を測り、楕円形プランを呈し、断面形はビーカー形を呈する。底面は東南に向かって僅かに傾斜する。

遺物は埋土中から弥生土器の小破片が出土している。

16号土坑（第22図）

D区南側西寄りで検出された。南北1.2m以上、東西1.8m、深さ75㎝を測り、多くが調査区壁に掛かるためプランは不明である。断面形はビーカー形を呈し、底面は平坦である。

遺物は埋土中から弥生土器の小破片が出土している。

17号土坑（第22図）

D区中央東寄りで検出された。南北1.4m、東西1.3m、深さ140㎝を測り、楕円形プランを呈する。内部は東側を除いて、底面に向かって膨らみを持ち、底面は平坦である。

遺物は埋土最上位から、土師器の高坏、須恵器の坏身、中位から底面にかけて弥生土器の甕、壺の破片が出土した。

18号土坑（第22図）

D区北側中央で検出された。長軸2.9m、短軸1.8m、深さ36㎝を測り、不定形プランを呈する。

遺物は陶器の甕の破片が底面より出土している。

19号土坑（第22図）

B区南側西寄りで検出された。長軸2.5m、短軸0.9m、深さ17㎝を測り、不定形プランを呈する。

遺物は碾臼が底面から出土している。

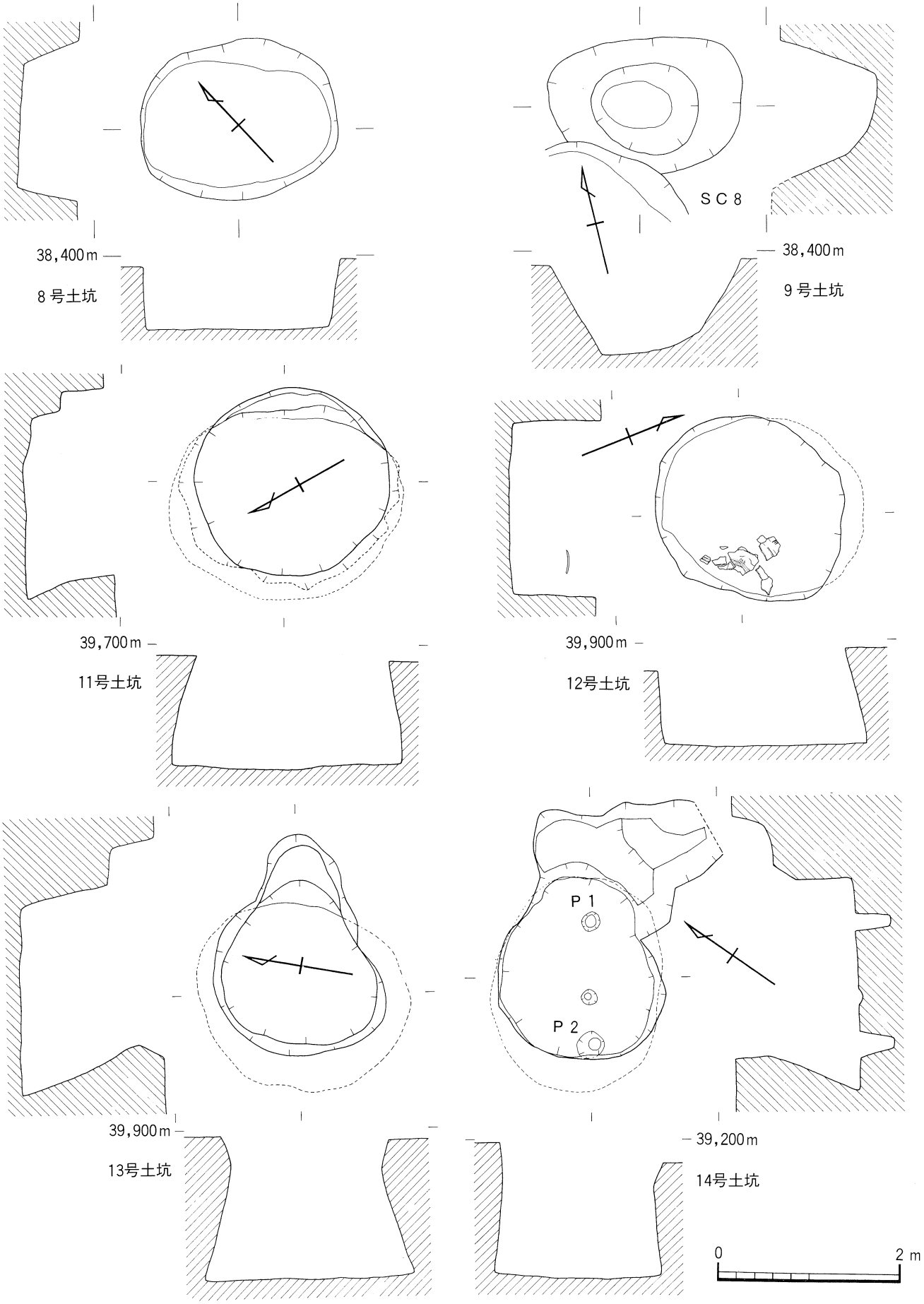
20号土坑（第22図）

C区南側西寄りで検出された。長軸4.5m、短軸0.9m以上、深さ40㎝を測り、楕円形プランを呈する。南側で幅35㎝のテラスを持つ。

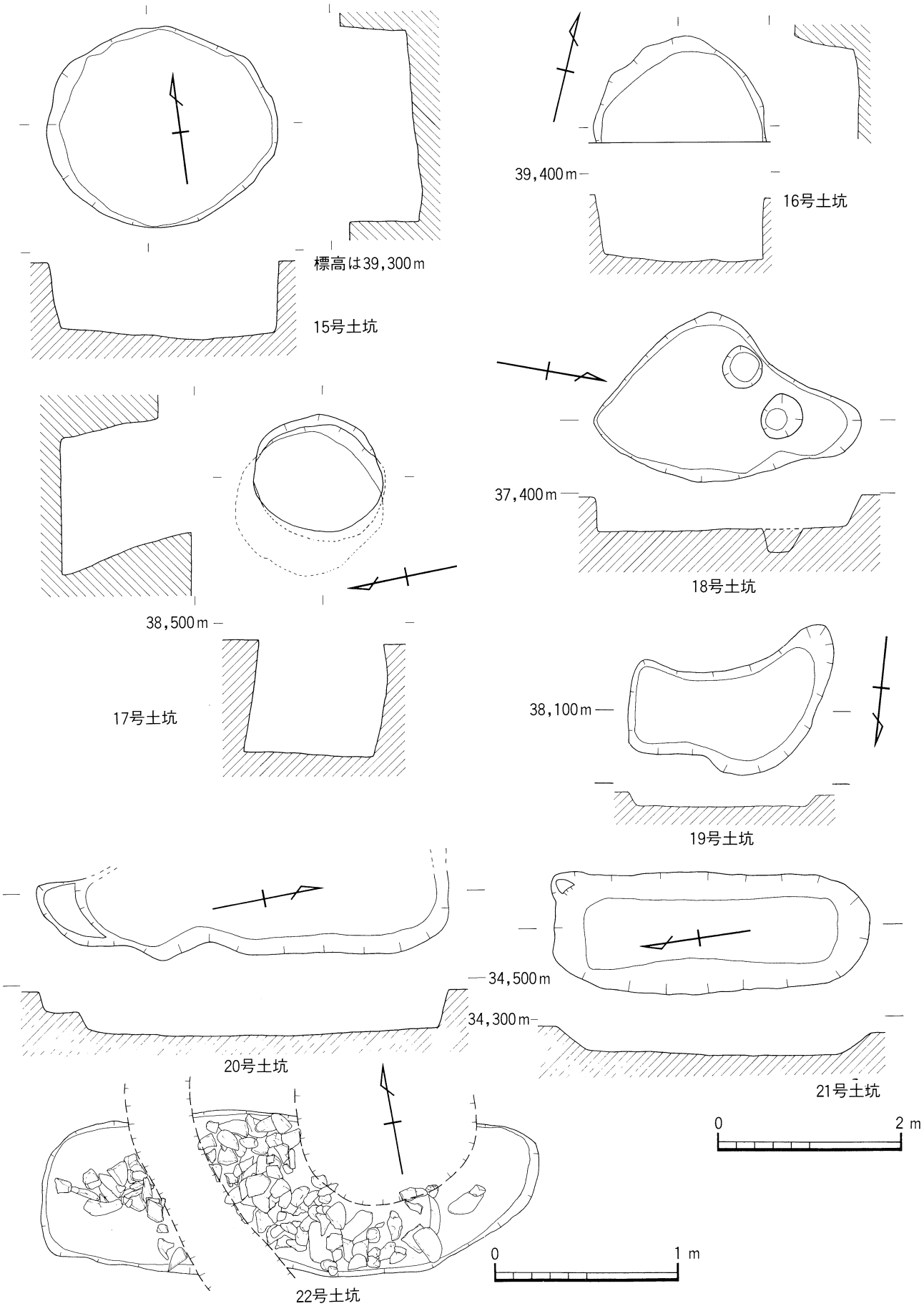
遺物は埋土中から陶器、磁器の小破片が僅かに出土している。

21号土坑（第22図）

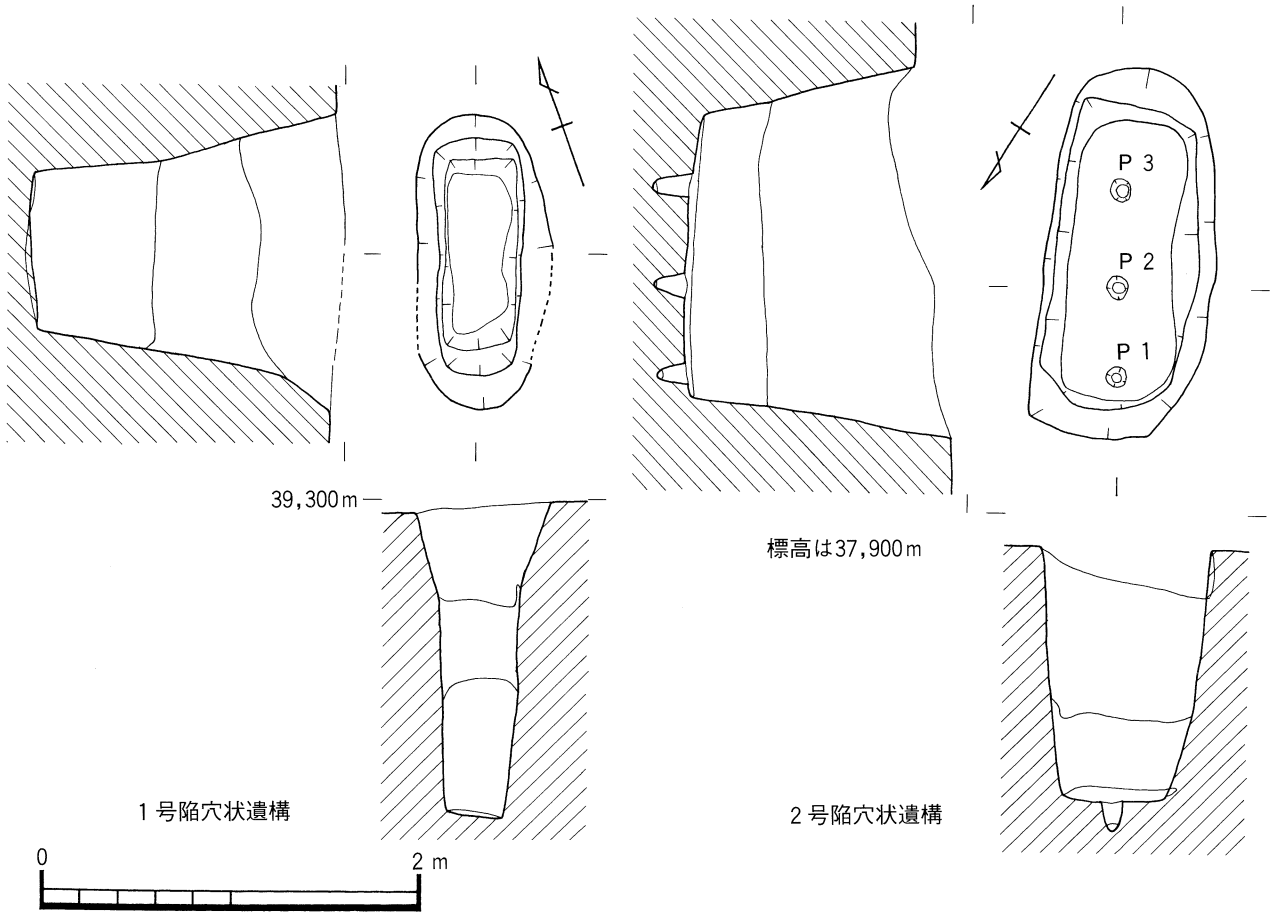
C区中央西寄りで検出された。長軸3.5m、短軸1.4m、深さ34㎝を測り、楕円形プランを呈



第21図　8・9・11～14号土坑実測図（1／60）



第22図　15～22号土坑実測図（15～21号土坑は１／60，22号土坑は１／30）



第23図　1・2号陥穴状遺構実測図（1／40）

する。

遺物は埋土中から擂鉢の破片が出土している。

22号土坑（第22図）

B区南側中央で検出された。長軸2.8m、短軸0.5m、深さ25cmを測り、楕円形プランを呈し、底面は平坦になる。遺構の大部分を攪乱によって破壊されている。遺構全体から20～30cmの円礫、拳大の円礫や角礫が大量に出土しており、一部で焼土が確認された。

遺物は出土しなかった。

23号土坑（第10図）

B区北側東寄りで検出された。長軸2.3m、短軸1.2m、深さ25cmを測り、楕円形プランを呈する。4号竪穴住居に切られる。

遺物は出土しなかった。

1号陥穴状遺構（第23図）

Ⅳ層A区南側西寄りで検出された。長軸1.6m、短軸0.7m、深さ168cmを測り、楕円形プランを呈し、上場から60cmの傾斜変換する位置以下からは長方形プランを呈し、底面は僅かにⅢ状になる。5号溝状遺構に切られる。

遺物は出土しなかった。

2号陥穴状遺構（第23図）

Ⅳ層B区北側西寄りで検出された。長軸2.0m、短軸0.9m、深さ144cmを測り、楕円形プラ

ンを呈し、底面は僅かに皿状になるが、3本の逆茂木痕が検出された。逆茂木痕は長軸より5°西に振っており、底面からの深さはＰ１が17㎝、Ｐ２が18㎝、Ｐ３が22㎝、それぞれの心心距離はＰ１－Ｐ２が48㎝、Ｐ２－Ｐ３が52㎝を測る。

遺物は出土しなかった。

1号溝状遺構（第5・7図）

Ｄ区北側からＢ区北側に向かって弧を描いて検出された。幅1.9～4.6ｍ、深さ22～30㎝を測り、断面形は皿状を呈する。底面はＤ区からＢ区へ向かって傾斜する。

1号掘立柱建物、12号土坑に切られる。

遺物は埋土中から弥生土器の甕、土師器の甕、壺、甑、高坏、埦、坏、須恵器の壺の破片が出土しており、Ｄ区東側に集中している。

2号溝状遺構（第4図）

Ａ区中央を南北に巡る。幅0.6～1.7ｍ、深さ19～43㎝を測り、断面形は逆台形を呈する。底面は北から南へ向かって傾斜する。

遺物は埋土中より、弥生土器の壺、土師器の甕、磁器の小破片が出土している。

3号溝状遺構（第4図）

Ａ区南側西寄りを南北に巡る。幅1.5～2.2ｍ、深さ13～34㎝を測り、断面形は皿状を呈する。底面は北から南へ向かって傾斜する。5号溝状遺構と切り合う。

遺物は底面の高さから、陶器の擂鉢、磁器の碗等の破片が数十点出土している。

4号溝状遺構（第4図）

Ａ区南側西寄りを南北に巡り、3号溝状遺構の東側で平行して検出された。幅0.5～1.0ｍ、深さ7～18㎝を測り、断面形は皿状を呈する。底面は北から南へ向かって傾斜する。5号溝状遺構と切り合う。

遺物は埋土中から、陶器、磁器の小破片が数点出土している。

5号溝状遺構（第4図）

Ａ区南側を東西に巡る。幅0.4～0.6ｍ、深さ15～40㎝を測り、断面形は逆台形を呈する。底面は西から東へ向かって傾斜する。2・3・4号溝状遺構と切り合い、1・2号竪穴住居を切る。

遺物は埋土中から、弥生土器の甕、壺、陶器、磁器の小破片が数点出土している。

6号溝状遺構（第5図）

Ｂ区北側を東西に巡る。幅2.8～4.4ｍ、深さ29～60㎝を測り、断面形はＵ字形を呈する。底面は西から東へ向かって傾斜する。

遺物は埋土中から、陶器、磁器の小破片、凹石が数点出土している。

7号溝状遺構（第5図）

Ｂ区中央を東西に巡る。幅2.3～5.0ｍ、深さ29～57㎝を測り、断面形はＵ字形を呈する。底面は西から東へ向かって傾斜する。6号溝状遺構と合流する。

遺物は埋土中から、陶器、磁器の小破片等が数点出土している。

8号溝状遺構（第5図）

B区中央を東西に巡る。幅0.7～1.1m、深さ16～20cmを測り、断面形はU字形を呈する。底面は西から東へ向かって傾斜する。6号溝状遺構と合流する。

遺物は埋土中から、陶器、磁器の破片が数点出土している。

9号溝状遺構（第5図）

B区南側を南北に巡る。幅0.8～1.7m、深さ11～33cmを測り、断面形はU字形を呈する。底面は北から南へ向かって傾斜し、南側で消滅する。

遺物は埋土中から、須恵器、陶器、磁器の小破片が数点出土し、遺構北側で角礫が数十点散在して出土した。

10号溝状遺構（第5図）

B区南側をL字に巡り、一方は南北、一方は東西に延びる。南北方向は4.5m、東西方向は19mを検出して消滅する。幅0.5～1.8m、深さ12～32cmを測り、断面形はU字形を呈する。底面は南北方向は北から南へ、東西方向は西から東へ向かって傾斜する。

遺物は埋土中から、須恵器、陶器、磁器の小破片が数点出土した。

11号溝状遺構（第5図）

B区北側東寄りを東西に巡る。幅2.5～3.8m、深さ25～40cmを測り、断面形はU字形を呈する。底面は西から東へ向かって傾斜する。

遺物は埋土中から、土師器の小破片が数点出土している。

1号道路状遺構（第6図）

C区南側で東西に巡る。掘削幅7.0～9.5m、掘削深80～300cm、路面幅3.0～3.2mを測り、路面は西から東へ傾斜し、底面はD区からB区へ向かって傾斜する。また両側の路側部分には溝を巡らしており、溝1は幅0.7～0.8m、深さ30cmを測り、溝2は幅0.6～1.5m、深さ60cmを測り、共に西から東へ傾斜する。

遺物は、路面の高さ、溝部分から陶器の擂鉢、磁器の碗が数十点出土している。

(2) 遺物

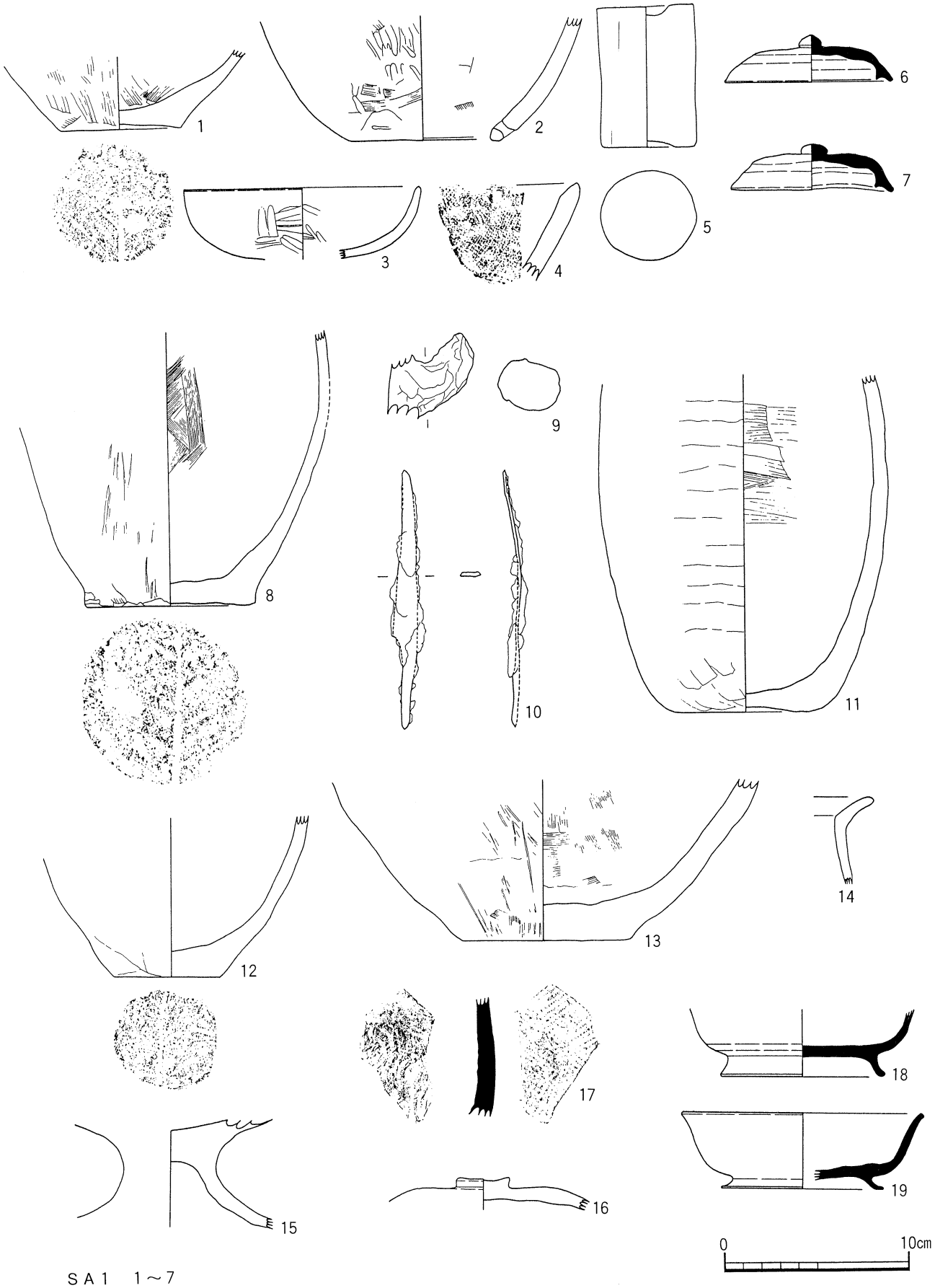
1号竪穴住居出土遺物（第24図）

1～5は土師器である。1は甕の底部で、上げ底を呈し、木の葉痕が見られる。2は埋甕炉に用いられた甑の胴部以下で底部付近に直径8mmの穿孔を1孔施す。4は布痕土器である。5は土製の支脚で、円筒形を呈し、両端を窪ましている。6・7は須恵器の坏蓋で、宝珠摘みを施す。

2号竪穴住居出土遺物（第24図）

8・9は土師器である。8は埋甕炉に用いられた甕の胴部から底部で、僅かに上げ底を呈し、木の葉痕が見られる。9は甑の牛角把手である。10は刀子で刃長9.0cm、最大刃幅1.3cm、重さ16.5gを測る。

3号竪穴住居出土遺物（第24図）



ＳＡ１　１～７
ＳＡ２　８～10
ＳＡ３　11～19

第24図　出土遺物実測図（1）　[1/3]

11～16は土師器である。11～14は甕で、11は長胴で僅かに上げ底を呈する。12・13は平底を呈し、12は木の葉痕が見られる。14は口縁部で短く「く」の字に外反する。15は高坏の坏部下位と脚部で、裾部にかけて大きく広がる。16は坏蓋でボタン状の摘みを施す。17～19は須恵器で、17は甕もしくは壺の胴部で、格子目の叩きを施す。18・19は坏身で高台の裾が広がる。

5号竪穴住居出土遺物（第25図）

20～22は土師器で、20は5号竪穴住居内で検出された。貼床のみ残る住居の埋甕炉に用いられた甕で、底部は僅かに上げ底となり、長胴の胴部を持ち、口縁部は短く「く」の字に外反する。21は5号竪穴住居の埋甕炉に用いられた甕で、底部は僅かに上げ底となる。23・24は須恵器で、23は坏蓋でボタン状の摘みを持つと考えられ、24は坏身で短い高台を持つ。

6号竪穴住居出土遺物（第25図）

25～27は土師器である。25は埋甕炉に用いられた甕で、底部は僅かに上げ底となる。26は高坏の脚部で短く、裾部が著しく外反する。27は土製の支脚で、寸胴な円筒形を呈する。

7号竪穴住居出土遺物（第25図）

28～30は土師器である。28・29は埋甕炉に用いられた甕で、28は長胴で安定しない平底を呈する。29は28の口縁部と考えられる。31は須恵器の坏蓋でボタン状の摘みを施す。32は土製の紡錘車で外径5.4㎝、内径0.8㎝、最大厚1.5㎝、重さ21.7ｇを測る。33は土錘で全長4.2㎝、重さ10.4ｇを測る。34は不明鉄器で最大長7.6㎝、最大幅2.7㎝、最大厚3.5㎜、重さ43.3ｇを測り、刃部に相当するような部分は見られない。35は両端に抉入を持つ石包丁で、約半分を欠損し、両面は丹念に磨かれている。現存で刃部長4.0㎝、最大幅4.8㎝、最大厚6㎜、重さ25.1ｇを測る。36は弥生土器の口縁部で端部外面に三角突帯を巡らし、刻みを施す。

1号竪穴状遺構出土遺物（第26図）

37～39は弥生土器の甕である。37・38は口縁部で、端部外面に丸みを帯びた台形状の突帯を巡らし、37は沈線、38は刻みを施す。37は胴部に2条の三角突帯を巡らす。39は充実した底部である。40は砥石で片面に擦痕を残す。最大長17.2㎝、最大幅14.7㎝、最大厚3.0㎝、重さ1162ｇを測る。

2号竪穴状遺構出土遺物（第26図）

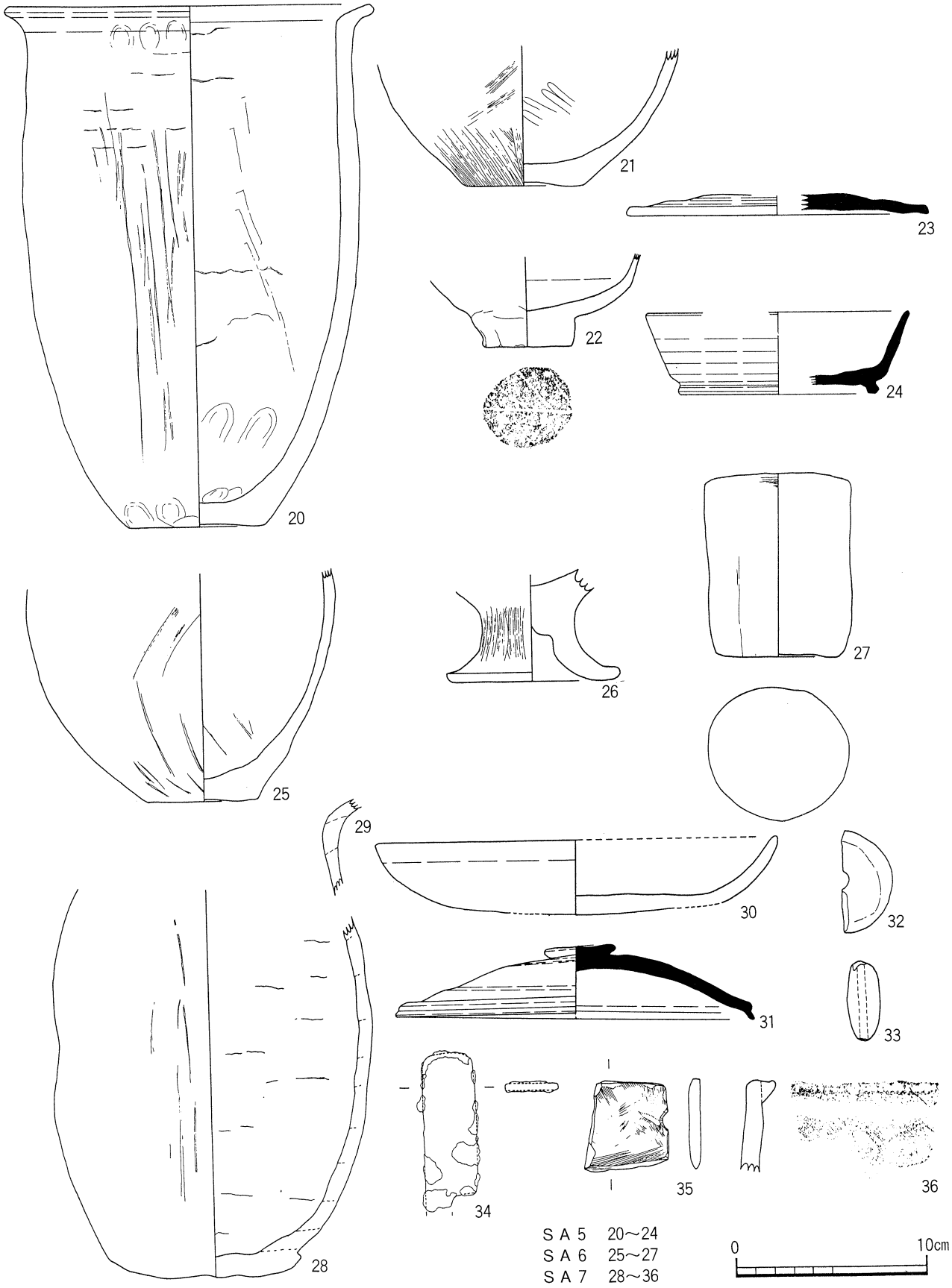
41は須恵器の坏身で短い高台を持つ。

3号竪穴状遺構出土遺物（第26図）

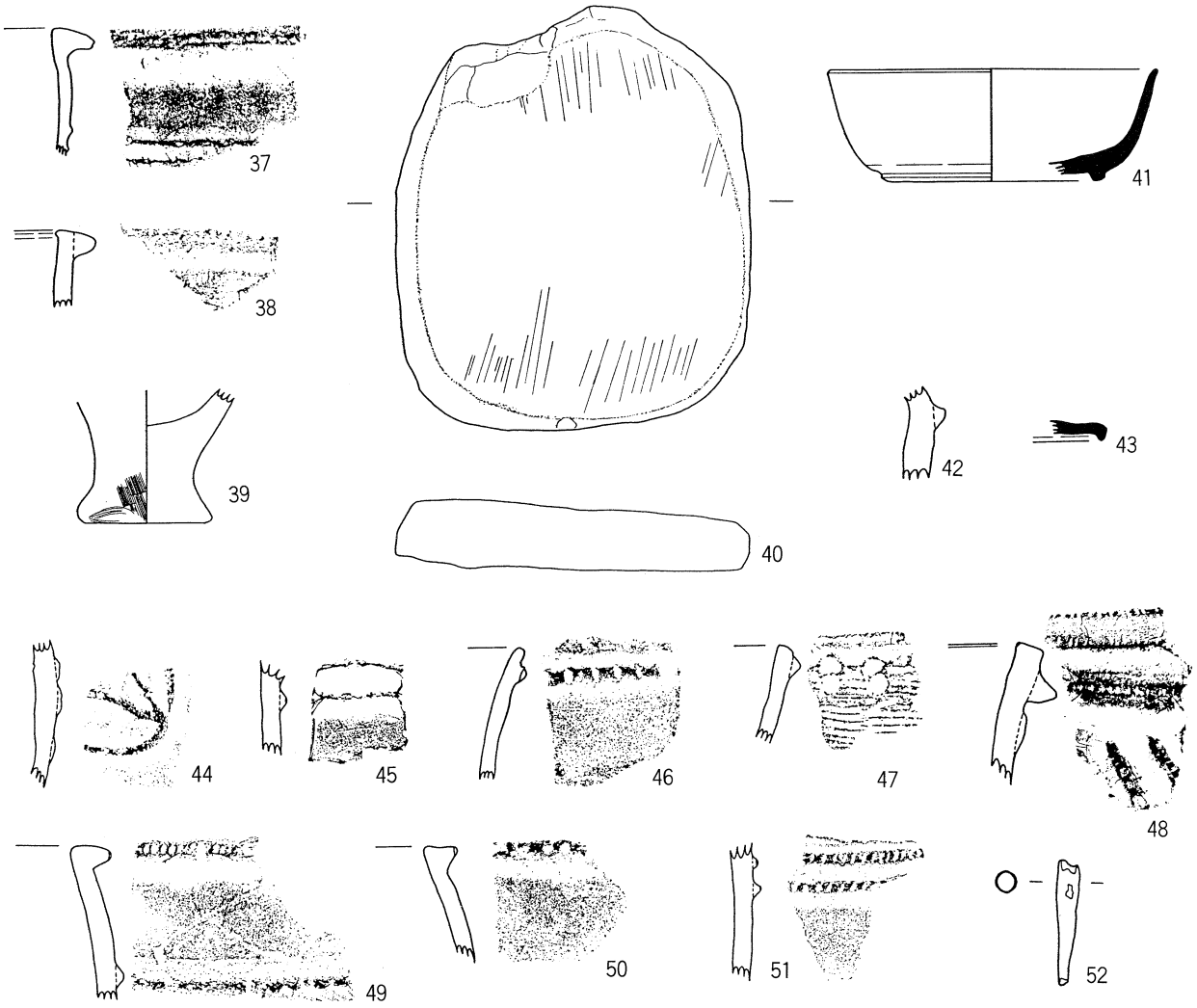
42は弥生土器の甕の胴部上位で刻みを持つ三角突帯を巡らす。43は須恵器の坏蓋である。

1号掘立柱建物出土遺物（第26図）

44はＰ4出土で弥生土器の壺の胴部で突帯を幾何学的に巡らす。45はＰ6出土で弥生土器の甕の口縁部付近で、外面に三角突帯を巡らし、刻みを施す。46・47はＰ9出土で、46は弥生土器の甕の口縁部で、端部外面のやや下の位置で三角突帯を巡らし、刻みを施す。47は縄文土器の口縁部で、端部外面に三角突帯を巡らし、刻みを施し、突帯下に孔列文を施す。調整は内外面共に条痕である。48～51はＰ10出土の弥生土器の甕で、48は口縁端部外面のやや下の位置で三角突帯を巡らし、その下斜方向にも突帯を巡らす。また口縁端部は面を造り、その両角と突



第25図　出土遺物実測図（2）［1/3］



ＳＢ１　37～40
ＳＢ２　41
ＳＢ３　42・43
ＳＴ１　44～51
ＳＳ１　52

第26図　出土遺物実測図（3）［1/3］

0　10cm

帯には刻みを施す。

１号柵列出土遺物（第26図）

52はキセルの吸い口で、現存で全長5.2cm、最大幅0.9cm、重さ2.7ｇを測る。

１号土坑出土遺物（第27図）

53～57は弥生土器である。53・54は甕で、53は口縁部で端部外面に丸みを帯びた台形状の突帯を巡らし、刻みを施し、口縁部下には三角突帯を巡らす。55～57は壺で、55は１段の稜を持って朝顔形に外反し、端部の面を造った部分、端部内面、稜部分は２列に刺突連点文を施す。56は僅かに上げ底を呈し、胴部中位で最大径となり、２条の沈線を持って頸部に至る。

２号土坑出土遺物（第27図）

58～61は弥生土器の甕である。58は胴部から口縁部にかけて僅かに内湾し、口縁端部外面、胴部上位に１条ずつ三角突帯を巡らす。59は口縁端部外面に刻みを施した台形状の突帯を巡らす。60・61は底部で平底になる。

３号土坑出土遺物（第27図）

62は縄文土器で、胴部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、胴部中位と口縁端部外

面に刻みを持つ突帯を巡らし、口縁端部の突帯直下には孔列文を施す。調整は内外面共に条痕である。

5号土坑出土遺物（第27図）

63～65は弥生土器の甕で、63は胴部から口縁部にかけて僅かに内湾しながら立上がり、口縁端部外面、胴部上位に刻みを持つ三角突帯を巡らす。口縁部の突帯は僅かに下方に垂れる。64は、口縁端部外面に半月形の突帯、胴部上位に三角突帯を巡らし、共に刻みを施し、端部内面は僅かに摘む。65は口縁端部外面に台形状の突帯、胴部上位に2条の三角突帯を巡らし、共に刻みを施す。

6号土坑出土遺物（第27図）

66～72は弥生土器である。66～69は甕で、66は口縁端部外面、胴部上位に2条の三角突帯を巡らし、共に刻みを施し、口縁部の突帯は粗く貼付けられる。69は口縁端部外面に三角突帯を巡らし、端部内面を摘み、端部面の断面が弧状になる。70は鉢で胴部から僅かに内湾しながら立上がり、端部内面を僅かに摘む。71は壺の口縁部で内面に三角突帯を巡らす。72は高坏で、脚部が著しく長く、脚部と坏部に明瞭な段が見られない。坏部、裾部共に直線気味に外反する。内外面共に、丁寧なナデを施す。

7号土坑出土遺物（第28図）

73は弥生土器の甕で、胴部から口縁部にかけて内湾しながら立上がり、口縁端部外面、胴部上位に三角突帯を巡らし、共に刻みを施す。

8号土坑出土遺物（第28図）

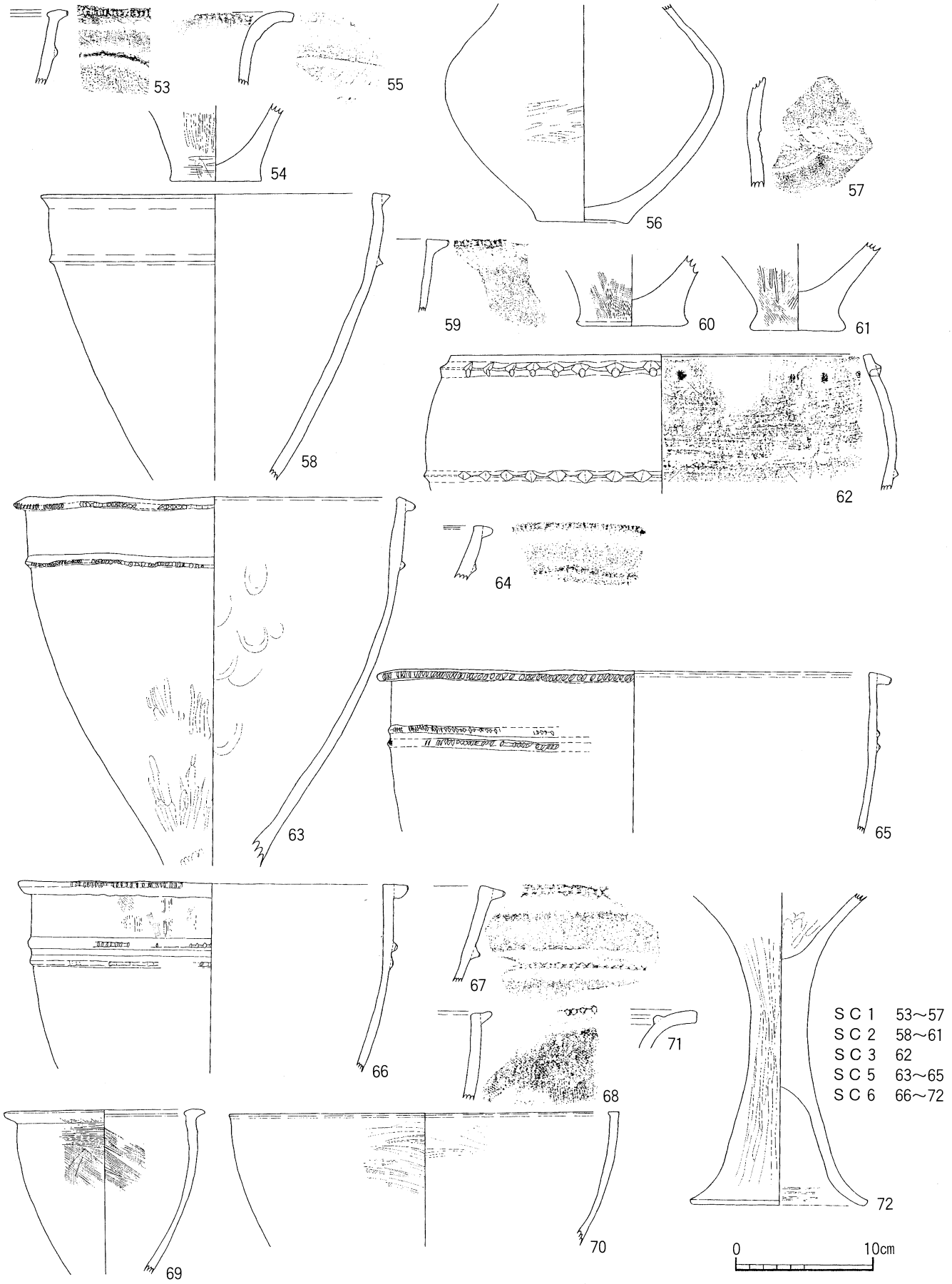
74～76は土師器である。74は甕の口縁部で「く」の字に外反する。75は甑の牛角把手である。76は埦で、外面が粗く削られている。

11号土坑出土遺物（第28図）

77～85は弥生土器である。77～80は甕で、77・78は口縁端部外面に三角突帯を巡らし、77は刻みを施す。79は充実した甕の底部で僅かに上げ底となる。81～84は壺で、81は頸部上位で口縁端部外面に台形突帯を巡らし沈線を施し、端部面には3条1単位の短い突帯を縦方向に巡らす。また口縁部内面、胴部と頸部の境には三角突帯を巡らす。85は断面三角形の2辺に刻目突帯を僅かに弧を描いて巡らす。両端に貫通する1孔と、一端に貫通しない1孔が串状のもので開けられている。また、実測図中矢印部分には張付いていた痕が残る。86～88は縄文土器で86・87は刻目突帯の直下に孔列文を施す。

12号土坑出土遺物（第28図）

89～96は弥生土器である。89～91は甕で、89は平底を呈し、胴部から口縁部にかけて直行する。口縁端部外面、胴部に刻目のある三角突帯を巡らし、胴部突帯は1条の突帯を三重にめぐらせ、最終的に下方に垂れさせる。91は口縁端部外面に沈線のある台形突帯を、胴部に三角突帯を4条巡らす。92～96は壺で、92は口縁端部外面に下方に垂れ、沈線のある台形突帯を巡らし、5条1単位以上の短い突帯を縦方向に、口縁端部内面には2条の三角突帯を巡らす。95は著しく丸く張った胴部を持ち、頸部との境に6条の三角突帯とその直下に4条1単位の短い突



第27図　出土遺物実測図（4）［¼］

帯を縦方向に巡らす。

13号土坑出土遺物（第29図）

97～102は弥生土器の甕である。97は口縁端部外面とその直下に２条、98は口縁端部外面のみに刻みのある三角突帯を巡らす。99・100は口縁端部外面に台形突帯を巡らす。101は充実した甕の底部で僅かに上げ底となる。

14号土坑出土遺物（第29図）

103～105は弥生土器である。103は充実した甕の底部で上げ底となり、端部付近に沈線を施す。104・105は壺で、104は口縁端部外面に下方に垂れ、沈線のある台形突帯を巡らし、４条１単位の短い突帯を縦方向に、口縁端部内面には１条の三角突帯を巡らす。106は砥石で両面に僅かに擦痕が残る。最大長12.4㎝、最大幅2.1㎝、重さ15.7ｇを測り、石材はシルト岩である。

17号土坑出土遺物（第29図）

107～112は弥生土器である。107～109は甕で、107は口縁端部外面とその直下に２条、108は口縁端部外面のみに刻みのある三角突帯を巡らす。109は口縁端部外面に沈線のある台形突帯、胴部に２条の三角突帯を巡らす。110・111は口縁部が１段の稜を持って朝顔形に外反する。113・114は縄文土器で、114は胴部中位と口縁端部外面に、113は口縁端部外面のみに刻目突帯を巡らし、共に口縁端部の突帯直下には孔列文を施す。調整は内外面共に条痕である。115は土師器の高坏の脚部で、裾部が大きく外反する。116は須恵器の坏身である。

18号土坑出土遺物（第29図）

117は肥前唐津産の甕で、外面には二重粘土粒を施し、内面には叩目が残る。118は焙烙で、材質は土師、口縁部に穿孔を施す。

19号土坑出土遺物（第29図）

119は碾臼の雄臼で、合せ部分に放射状に溝を刻む。最大径28.4㎝、最大幅2.1㎝、重さ12.8㎏を測る。

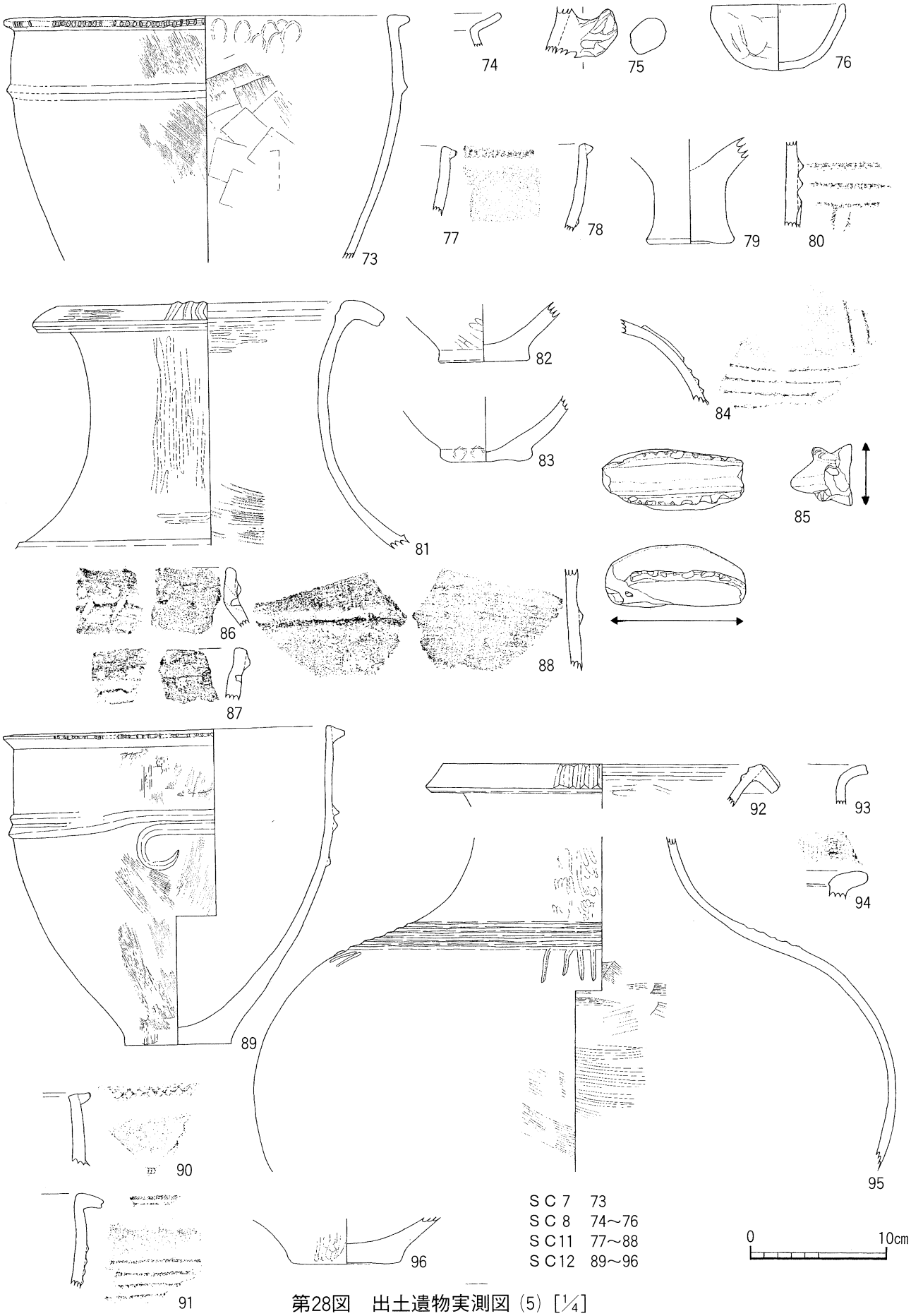
21号土坑出土遺物（第29図）

120は肥前産の擂鉢である。

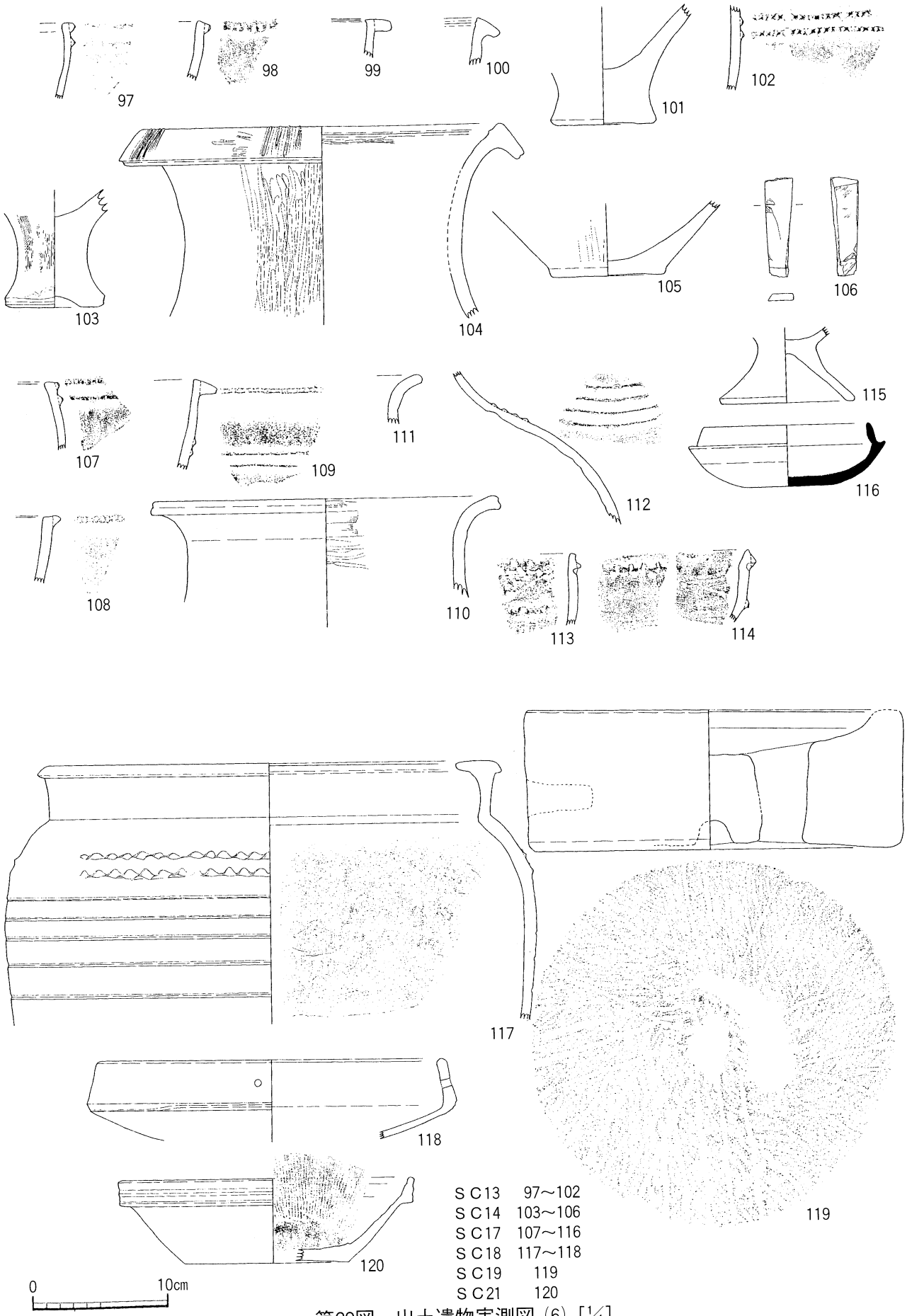
１号溝状遺構出土遺物（第30図）

121～124はＢ区内、125～136はＤ区内より出土した。121・122は土師器の甕で平底を呈する。123は弥生土器の甕で、口縁端部外面に下方に垂れる台形状の突帯と胴部に２条以上の三角突帯を施す。124は土師器の坏である。

125～133は土師器である。125・126は甑で、牛角把手を有し、125は口縁部に最大径を持つと考えられる。127・128は壺で、127は丸く張った胴部を持ち、口縁部は短く外反する。128は小型の壺で丸底を呈し、口縁部は「く」の字に外反する。129～131は高坏で、130は裾部が１段の稜を持って外反する。131は裾端部が上方に摘み上げられている。135・136は弥生土器である。135は甕で、胴部中位から口縁部に向い内湾しながら立上がり、口縁端部外面に台形状の突帯、胴部に３条の三角突帯を巡らす。136は壺の胴部中位から上位にかけてで、肩部との



第28図　出土遺物実測図（5）［¼］



S C13	97～102
S C14	103～106
S C17	107～116
S C18	117～118
S C19	119
S C21	120

第29図　出土遺物実測図（6）［¼］

境に１段の稜を持ち、その直下に平行沈線文、重孤文を施す。

２号溝状遺構出土遺物（第31図）

137は弥生土器の壺の口縁部で、１段の稜を持って外反し、口縁端部内面、稜上部に刺突連点文を施す。138は土師器の甕で、平底を呈し、胴部中位よりやや下で最大径を持つ。

３号溝状遺構出土遺物（第31図）

139は須恵器の鉢で、外面に格子目叩きが残り、自然釉がかかる。140～142は陶器である。141は大碗で、口縁部で外反する。胎土が白色で、口縁部に黒釉を施す。142は碗で褐釉を施し、外面屈曲部以下は露胎である。143～147は磁器である。143・144は肥前産染付碗で、外面に丸文を描き、見込みには五弁花文を描く。畳付は釉はぎで、砂目が付着する。高台内面底には渦福の銘が見られる。144は外面に雪輪文、梅樹文を描く。畳付は釉はぎである。高台内面底には大明年製の崩れ銘が入る。145は肥前産染付蓋で外面に広葉を描く。摘み端部は釉はぎ、口縁部は露胎である。146は肥前産筒型湯飲み染付け碗で、外面には輪花文を描く。見込みには五弁花文を描く。畳付は釉はぎである。147は香炉で青磁釉を施し、高台内面、内面は口縁部を除いて、露胎である。

４号溝状遺構出土遺物（第31図）

148は肥前産磁器染付小坏で、畳付は釉はぎである。

149は磨製石鏃で、抉りが弧を描く。最大長3.1㎝、最大幅2.1㎝、最大厚2.5㎜、重さ1.6ｇを測る。

５号溝状遺構出土遺物（第31図）

150・151は弥生土器である。150は充実した甕の底部である。151は壺の肩部で４条の三角突帯を巡らす。

６号溝状遺構出土遺物（第31図）

152は凹石で両面に著しい量の敲打痕がみられ、実測図中トーン部分には磨痕が残る。最大長24.6㎝、最大幅14.1㎝、最大厚7.2㎜、重さ3.6㎏を測り、石材は砂岩である。

７号溝状遺構出土遺物（第32図）

153は和釘で、最大長13.1㎝、最大厚1.3㎝、孔内径5.5㎜、重さ51.6ｇを測る。

８号溝状遺構出土遺物（第32図）

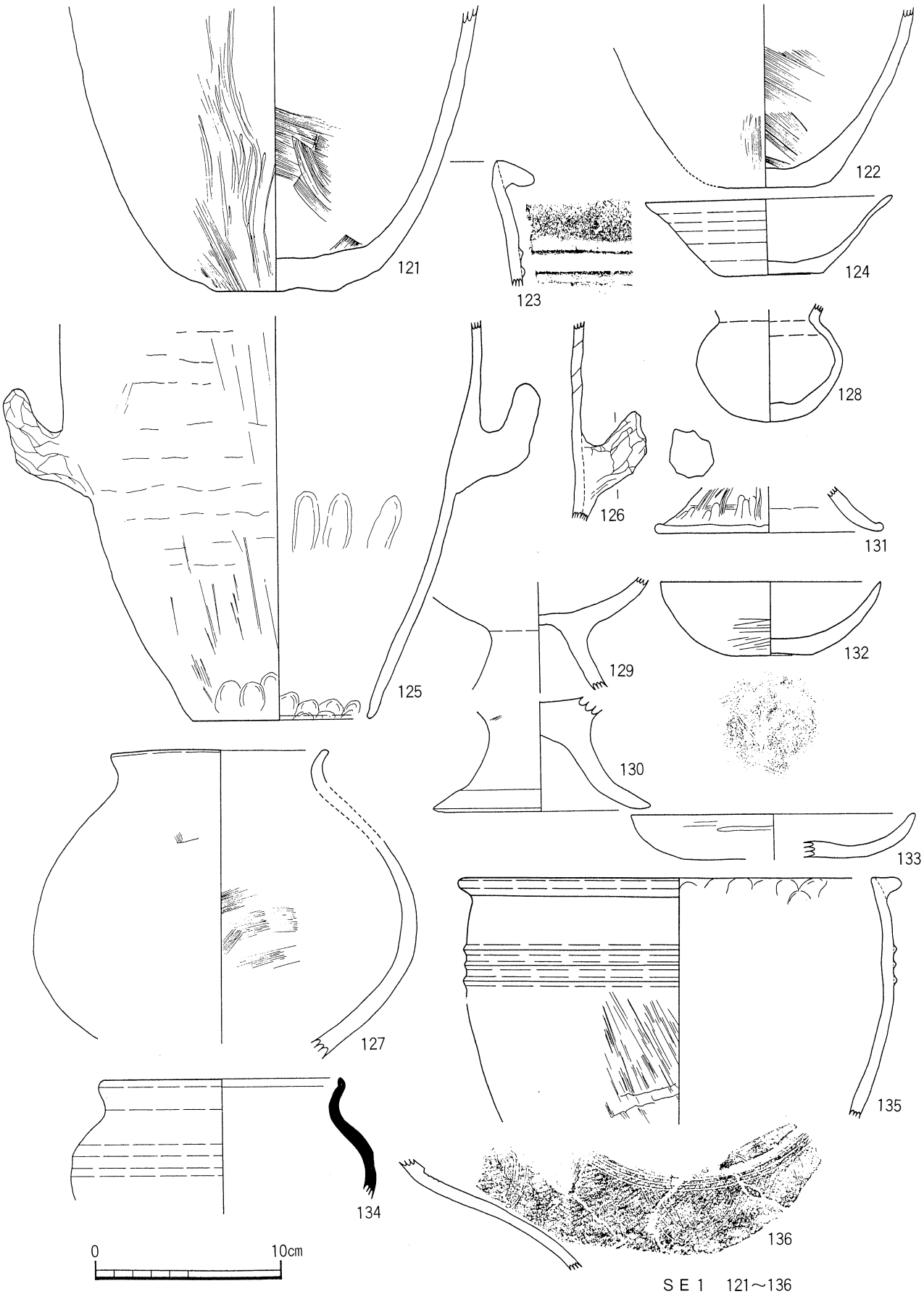
154は須恵器の坏身の底部で、短い高台を有する。

10号溝状遺構出土遺物（第32図）

155は須恵器の長頸壺の頸部である。

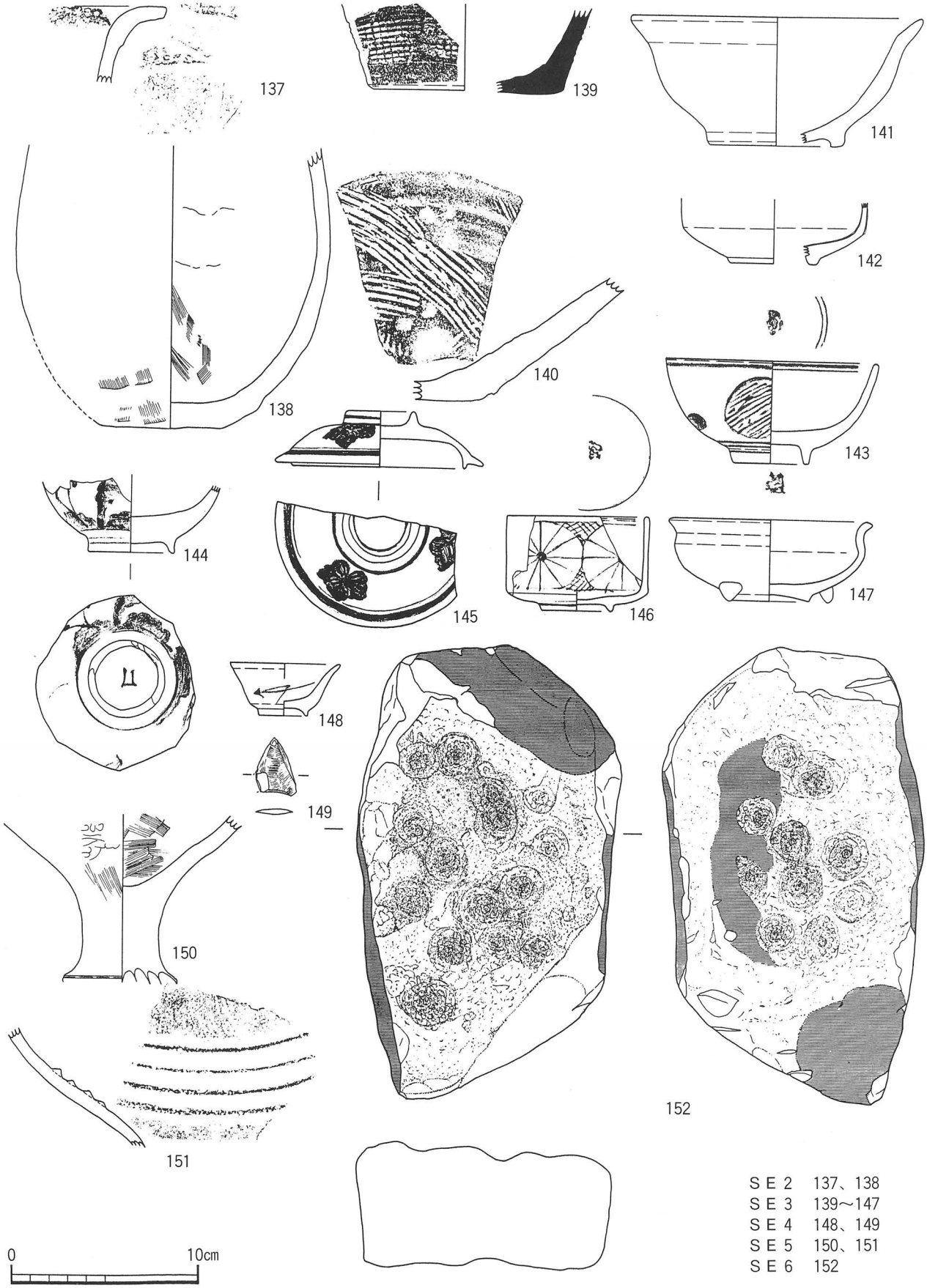
１号道路状遺構出土遺物（第32図）

156は埋土上層で検出された。須恵器の円面硯で、陸部が欠損し、環状台脚柳葉状の透しが入る。157～159は陶器である。158は碗で黄灰釉を施し、見込みは蛇の目釉はぎ、畳付は釉はぎで、砂目が付着する。159は皿で内面に青緑釉、外面に緑灰釉を施し、見込みは蛇の目釉はぎで砂目が付着し、外面体部中位以下は露胎である。160は肥前産染付磁器皿で、見込みに草花文を描き、畳付は釉はぎである。161～163は肥前産染付磁器碗で、161は外面に青磁釉、



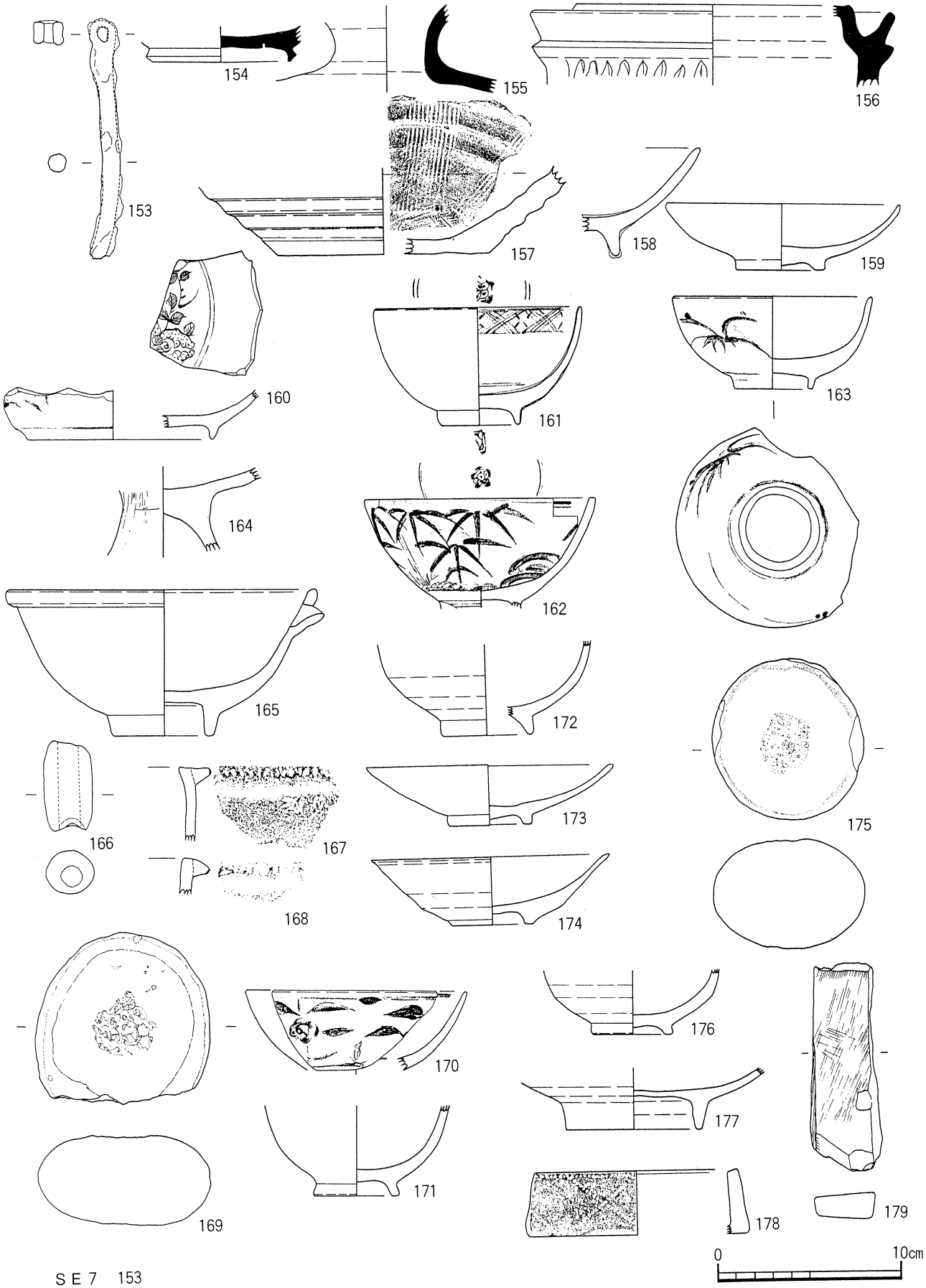
ＳＥ１　121～136
（Ｂ区　121～124、Ｄ区125～136）

第30図　出土遺物実測図（7）［1/3］



ＳＥ２　137、138
ＳＥ３　139～147
ＳＥ４　148、149
ＳＥ５　150、151
ＳＥ６　152

第31図　出土遺物実測図（8）　[1/3]



ＳＥ７　153
ＳＥ９　154
ＳＥ10　155
ＳＤ１　156～163
各 Pit　164～179

第32図　出土遺物実測図（9）

口縁内面に四方襷文を描き、見込みには五弁花文を描く。高台内面底には渦福の銘が見られる。畳付は釉はぎで、砂目が付着する。162は外面に竹笹文、草花文を描き、見込みには五弁花文を描く。163は梅樹文を描き、見込みは蛇の目釉はぎ、畳付は釉はぎで、砂目が付着する。

各柱穴出土遺物（第32図）

164は1号柱穴出土の土師器の高坏の脚部である。165は2号柱穴出土の陶器の片口鉢で、口縁帯の下に注口を付ける。166は3号柱穴出土の土錘で、最大長5.0㎝、最大径2.6㎝、孔内径1.3㎝を測る。167は4号柱穴出土の弥生土器の甕で、口縁端部外面に刻みの入る三角突帯を巡らす。168は5号柱穴出土の弥生土器の甕で、口縁端部外面に台形状の突帯を巡らす。169は6号柱穴出土の敲石で両面中央部に敲打痕を残す。最大長9.4㎝、最大厚4.8㎝、重さ700ｇを測る。170は7号柱穴出土の肥前産染付磁器碗で、外面に草花文を描く。171は8号柱穴出土の陶器の碗である。172は9号柱穴出土の陶器の碗である。173は10号柱穴出土の陶器の皿で、内面に青緑釉、緑灰釉、外面に緑灰釉を施し、見込みは蛇の目釉はぎで砂目が付着し、外面体部中位以下は露胎である。174は11号柱穴出土の土師器の皿で、内外面に白釉を施す。175は12号柱穴出土の敲石で両面中央部に敲打痕を残す。最大長9.0㎝、最大厚6.0㎝、重さ640ｇを測る。176・177は13号柱穴出土である。176は陶器の碗で、内面に黄灰釉、外面に赤褐釉を施し、畳付は釉はぎである。177は陶器の皿で、黄灰釉を施し、外面体部中位以下は露胎で、見込みは蛇の目釉はぎである。178は14号柱穴出土の土師質の火容で、外面に格子目状に刺突連点文を施す。179は15号柱穴出土の砥石で、片面のみに擦痕を残す。最大長11.5㎝、最大幅2.9㎝、最大厚2.0㎝、重さ100ｇを測る。

出土遺物観察表１　（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）

（　　）は反転復元径

番号	遺構名	種類・器種	法量（cm）			器面調整		色調		胎土	備考
			口径	底径	器高						
1	１号竪穴住居	土師器甕		9.1		内面 外面	ナデ・ハケ ナデ・ハケ	内面 外面	灰黄褐色 にぶい黄褐色	砂粒、細砂粒を多量に含む	木の葉底
2	〃	土師器甑		(8.0)		内面 外面	ハケ・ミガキ ハケ・ミガキ	内面 外面	黄灰・にぶい黄・赤 橙・赤・灰赤	砂礫、砂粒をごく僅かに、光る微粒子を含む 細砂粒を多量に含む	穿孔推定2箇所
3	〃	土師器椀	(13.7)			内面 外面	ミガキ ケズリ・ミガキ	内面 外面	橙 橙	細砂粒を少量含む	条痕
4	〃	土師器鉢				内面 外面	ナデ	内面 外面	橙 橙		
5	〃	土師器支脚			7.8	内面 外面		内面 外面			
6	〃	須恵器坏蓋	9.2		2.6	内面 外面	ナデ ケズリ・ナデ	内面 外面	褐灰・灰白 褐灰	白っぽい細砂粒を少量含む	宝珠摘み
7	〃	須恵器坏蓋	8.9		2.7	内面 外面	ナデ ナデ・ケズリ	内面 外面	褐灰 褐灰	細砂粒を少量含む	宝珠摘み
8	２号竪穴住居	土師器甕		9.7		内面 外面	ハケ・ナデ	内面 外面	にぶい橙・にぶい褐色 にぶい橙	砂礫を多量に含む　乳白色の粒を少量含む	木の葉底
9	〃	土師器甑				内面 外面	ハケ・ナデ ナデ	内面 外面	褐灰・灰褐 褐灰	褐色、灰色系の礫や砂粒をかなり多量に含む	牛角把手
11	３号竪穴住居	土師器甕		8.4		内面 外面	ナデ・ハケ ナデ	内面 外面	にぶい黄橙 にぶい橙	砂礫、砂粒、細砂粒を多量に含む	
12	〃	土師器甕		5.8		内面 外面	ナデ ケズリ	内面 外面	にぶい橙 黄褐・黄灰・にぶい橙	６mm以下の礫、砂粒、細砂粒を多量に含む 黒く艶のある粒子を含む	木の葉底
13	〃	土師器甕		(9.2)		内面 外面	ハケ ケズリ	内面 外面	にぶい黄橙・暗灰 灰・暗灰	砂礫を少量、砂粒、細砂粒を多量に含む 黒く艶のある粒子を含む	
14	〃	土師器甕				内面 外面	ナデ・ハケ ナデ・ハケ	内面 外面	黄橙 橙・浅橙	砂粒を含む	
15	〃	土師器高坏				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	橙 橙・灰	白い砂粒と細砂粒をごく少量含む	
16	〃	土師器坏蓋				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	黄橙 橙	細砂粒を少量含む	
17	〃	須恵器壺？				内面 外面	 タタキ	内面 外面	褐灰 褐灰	白と黒の細砂粒を少量含む 精良	
18	〃	須恵器坏身		(8.9)		内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	褐灰 褐灰	細砂粒を少量含む 精良	高台
19	〃	須恵器坏身		8.8		内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	青灰 青灰	細砂粒、砂粒、砂礫を含む	高台
20	５号竪穴住居	土師器甕	(19.4)	7.2	27.7	内面 外面	ハケ ハケ	内面 外面	にぶい黄橙・黄灰・暗灰黄 にぶい黄橙・灰黄褐・暗灰黄	砂粒、細砂粒を多量に含む 砂礫を少量含む	
21	〃	土師器甕		5.2		内面 外面	ミガキ ナデ	内面 外面	橙 橙	褐灰の砂粒を含む	
22	〃	土師器甕		4.5		内面 外面	ナデ・ミガキ ナデ	内面 外面	橙 黄橙	細砂粒を少量含む	木の葉底
23	〃	須恵器坏蓋	(14.8)			内面 外面	ケズリ ケズリ	内面 外面	灰白 灰白	細砂粒をごく少量含む	
24	〃	須恵器坏身	(13.7)	(10.2)	(5.4)	内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	褐灰 灰褐	細砂粒をごく少量含む	
25	６号竪穴住居	土師器甕		5.8		内面 外面	ナデ ハケ	内面 外面	橙・黒 赤橙・橙・にぶい黄褐	砂礫を中程度、砂粒、細砂粒を多量に含む	
26	〃	土師器高坏		9.1		内面 外面	ナデ ハケ・ナデ	内面 外面	橙 橙	褐灰の細砂粒を多量に含む	
27	〃	土師器支脚			9.8	内面 外面		内面 外面			
28	７号竪穴住居	土師器甕		8.5		内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	明黄褐・暗褐色 明黄褐・にぶい黄褐	暗赤褐色の砂礫及び、黒色、灰色の砂粒を多く含む	29と同一個体か？
29	〃	土師器甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	明黄褐・暗褐色 明黄褐・にぶい黄褐	暗赤褐色の砂礫及び、黒色、灰色の砂粒を多く含む	28と同一個体か？
30	〃	土師器皿	20.1	7.1	4.9	内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	赤橙・橙・暗赤褐 赤橙・橙・黒褐	白い細砂粒を少量含む	
31	〃	須恵器坏蓋	18.8		3.9	内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	黄灰・灰黄・黒 黄灰・暗黄灰・黒	砂粒を少量、細砂粒を多量に含む	

出土遺物観察表２　（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）

（　　）は反転復元径

番号	遺構名	種類・器種	法量（cm）			器面調整		色調		胎土	備考
			口径	底径	器高						
32	７号竪穴住居	土師器 紡錘車				内面 外面		内面 外面	淡橙 淡橙	砂粒を少量含む	
33	〃	土師器 土錘				内面 外面		内面 外面		砂粒を少量含む	
36	〃	弥生土器 壺				内面 外面	ハケ・ナデ	内面 外面	橙 橙	砂粒を含む	刻目突帯
37	1号竪穴状遺構	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	橙・灰褐 淡黄橙	白色の砂粒を含む	突帯
38	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	浅黄橙 浅黄橙	２㎜以下の砂粒を含む	刻目突帯
39	〃	弥生土器 甕		5.4		内面 外面	ナデ ナデ・ハケ	内面 外面	にぶい黄橙 浅黄橙	褐色の砂粒を含む	
41	2号竪穴状遺構	須恵器 坏身	(12.8)	(9.2)	4.6	内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	褐灰 褐灰	５㎜以下の乳白色の粒と砂粒を少量含む	
42	3号竪穴状遺構	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	浅黄橙 浅黄橙	細砂粒を含む	刻目突帯
43	〃	須恵器 坏蓋	(9.3)			内面 外面	ナデ ケズリ	内面 外面	灰 灰	精良	
44	1号掘立柱建物	弥生土器 壺				内面 外面	ミガキ ミガキ	内面 外面	にぶい橙 にぶい橙	灰色系の砂粒、細砂粒を多く含む 無色透明、黒の光る粒子を含む	
45	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	褐灰 赤褐	ガラス状に光るごく小さな粒や、砂粒、細砂粒を含む	
46	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	橙 橙	２㎜未満の灰、褐色の砂粒及び無色透明の光る粒を含む	
47	〃	縄文土器 深鉢				内面 外面	条痕 条痕	内面 外面	灰黄褐 橙	ガラス状に光るごく小さな粒や、砂粒を含む	刻目突帯 孔列文
48	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	橙 橙	砂粒を含む	
49	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	にぶい橙 にぶい橙	２㎜以下の褐色、赤褐色、灰色の砂粒を含む	刻目突帯
50	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	浅黄橙 浅黄橙	２㎜以下の赤褐色、灰色、黒の砂粒を含む	
51	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	灰黄褐 にぶい黄褐	２㎜以下の褐色、灰色の砂粒を含む １㎜以下の透明な光る粒も微量含む	刻目突帯
53	１号土坑	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	橙、にぶい橙 橙	褐灰、灰白の砂粒を多量に含む	刻目突帯
54	〃	弥生土器 甕		6.5		内面 外面	不明 ミガキ	内面 外面	褐灰 にぶい橙・にぶい赤橙	褐灰の砂粒を含む	
55	〃	弥生土器 壺				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	浅黄橙 浅黄橙	褐色の砂粒を多量に含む	連点文
56	〃	弥生土器 壺		6.7		内面 外面	ナデ ミガキ	内面 外面	にぶい黄橙 にぶい橙	砂粒、細砂粒を多量に含む	
57	〃	弥生土器 壺				内面 外面	ナデ・ハケ ナデ・ハケ	内面 外面	褐灰・にぶい橙 褐灰・にぶい橙	灰色、乳白色の微細粒を多量に含む	
58	２号土坑	弥生土器 甕	26.1			内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	にぶい黄橙 にぶい褐色	砂粒、細砂粒を多量に含む	突帯
59	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ・ミガキ ナデ・ミガキ	内面 外面	明黄褐 褐灰	２㎜以下の褐色、黒色の砂粒を含む	刻目突帯
60	〃	弥生土器 甕		(8.3)		内面 外面	ナデ・ハケ ハケ	内面 外面	にぶい黄橙 にぶい褐・にぶい橙	砂礫を少量、砂粒、細砂粒を多量含む	
61	〃	弥生土器 甕		7.1		内面 外面	ナデ ハケ・ミガキ	内面 外面	暗灰黄・灰黄褐 明赤褐・にぶい褐	砂礫を少量、砂粒、細砂粒を多量含む	
62	３号土坑	縄文土器 深鉢	(30.2)			内面 外面	条痕 条痕	内面 外面	にぶい橙 灰褐	ガラス状の粒子を含む 砂粒、細砂粒を多量に含む	刻目突帯 孔列文
63	５号土坑	弥生土器 甕	(27.5)			内面 外面	ナデ ナデ・ミガキ	内面 外面	にぶい橙・橙・暗褐 にぶい橙・褐灰・灰褐・暗褐	褐色、灰色、黒、乳白色の砂粒を多量に含む	刻目突帯
64	〃	弥生土器 甕				内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	にぶい黄橙・黄灰 橙	２㎜以下の灰色、１㎜以下の赤褐、白の砂粒をやや多めに含む	刻目突帯
65	〃	弥生土器 甕	(34.8)			内面 外面	ナデ ナデ	内面 外面	明黄褐 にぶい黄褐・灰黄褐	2㎜以下の褐色、赤褐色、灰色の砂粒を含む	刻目突帯

出土遺物観察表 3　（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）

（　　）は反転復元径

番号	遺構名	種類・器種	法量（cm）			器面調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
66	6号土坑	弥生土器甕	(26.9)			内面 ナデ 外面 ナデ・ハケ	内面 にぶい橙 外面 にぶい橙	褐色系の礫をやや多く含む 艶のある黒、無色透明で光る粒子を含む	刻目突帯
67	〃	弥生土器甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ハケ	内面 にぶい橙 外面 にぶい黄橙	砂粒、細砂粒を含む	刻目突帯
68	〃	弥生土器甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ハケ	内面 橙 外面 灰褐	ガラス状に光る透明の小粒や細砂粒を多量に含む	刻目突帯
69	〃	弥生土器甕	15.1			内面 ハケ 外面 ハケ	内面 橙・にぶい褐 外面 にぶい褐	褐、褐灰等の砂礫を少量、砂粒を多量に含む	突帯
70	〃	弥生土器鉢	(28.1)			内面 ナデ・ハケ 外面 ハケ	内面 にぶい橙 外面 にぶい橙	褐色系、灰色系、乳白色、光沢のある黒などの、砂粒、細砂粒を多量に含む	
71	〃	弥生土器壺				内面 ナデ・ミガキ 外面 ナデ・ミガキ	内面 明赤褐 外面 明赤褐	1㎜以下の赤褐色、黒、灰色の砂粒、無色透明で光る微細粒を含む	突帯
72	〃	弥生土器高坏		13.2		内面 ナデ・ミガキ 外面 ナデ・ミガキ	内面 橙 外面 橙・にぶい橙	褐灰、橙の砂粒を含む 赤褐、褐灰の砂粒を多量に含む	
73	7号土坑	弥生土器甕	(27.7)			内面 ハケ 外面 ナデ・ハケ	内面 にぶい橙 外面 橙・にぶい橙・にぶい褐	砂礫を少量、砂粒、細砂粒を多量に含む 透明の1㎜程度の粒を少量含む	刻目突帯
74	8号土坑	土師器甕				内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	内面 にぶい黄褐 外面 にぶい黄褐	2㎜未満の灰色の砂粒、1㎜以下の無色透明な光る粒を含む	
75	〃	土師器甑				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 橙	ガラス質や灰色系の微細粒をわずかに含む	牛角把手
76	〃	土師器 **埦**	(9.6)	(4.8)	4.9	内面 ナデ 外面 ナデ・ケズリ	内面 にぶい橙 外面 にぶい橙	褐色、艶のある黒、淡い乳白色の砂粒をかなり多量に含む	
77	11号土坑	弥生土器甕				内面 ナデ 外面 ヨコナデ・ハケ	内面 橙 外面 橙	2㎜以下の褐色、灰色、白色の砂粒を含む	刻目突帯
78	〃	弥生土器甕				内面 ナデ 外面	内面 橙 外面 橙	砂粒を含む	突帯
79	〃	弥生土器甕		(7.5)		内面 外面 ナデ	内面 にぶい褐 外面 にぶい黄橙	褐灰の砂粒、細砂粒を含む	
80	〃	弥生土器甕				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 にぶい橙 外面 橙	ガラス状に光る透明の小さな粒、砂粒、細砂粒を多量に含む	刻目突帯
81	〃	弥生土器壺	(21.2)			内面 ナデ・ミガキ・ハケ 外面 ミガキ・ヨコナデ	内面 橙・にぶい黄橙 外面 橙	褐灰の砂粒を多量に含む	突帯
82	〃	弥生土器壺		6.8		内面 ナデ 外面 ミガキ	内面 浅黄 外面 橙	内面は、褐灰の細砂粒、外面は褐灰の砂粒を多量に含む	
83	〃	弥生土器壺		(6.8)		内面 外面 ナデ	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい黄橙・浅黄・暗灰	砂粒、細砂粒を多量に含む	
84	〃	弥生土器壺				内面 ハケ 外面 ハケ	内面 橙 外面 にぶい黄橙	褐色、灰色系の砂粒、黒く光る粒、透明の光る粒子を多量に含む	突帯
85	〃	弥生土器不明				内面 ナデ 外面 ミガキ	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい黄橙	1㎜以下の黒、褐色、白色(淡黄)の砂粒、0.5㎜以下の無色透明の光る粒を含む	刻目突帯
86	〃	縄文土器壺？				内面 条痕 外面 条痕	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい黄橙	透明、半透明の粒を含む 細砂粒を多量に含む	刻目突帯 孔列文
87	〃	縄文土器深鉢				内面 条痕 外面 条痕	内面 にぶい黄褐・黄橙・黒 外面 にぶい黄橙	透明、半透明な粒を含む 砂粒、細砂粒を多量に含む	刻目突帯 孔列文
88	〃	縄文土器深鉢				内面 条痕 外面 条痕・ナデ	内面 にぶい褐・褐灰 外面 橙	砂粒を含む	刻目突帯
89	12号土坑	弥生土器甕	24.2	7.9	23.5	内面 ナデ 外面 ナデ・ハケ	内面 赤褐 外面 にぶい橙	砂礫わずか、砂粒、細砂粒を多量に含む	刻目突帯 突帯
90	〃	弥生土器甕				内面 ナデ 外面 ヨコナデ・ナデ	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい黄橙	細砂粒を含む	刻目突帯 突帯
91	〃	弥生土器甕				内面 ナデ・ハケ 外面 ヨコナデ・ナデ	内面 橙・にぶい褐 外面 にぶい赤褐	乳白色粒、金雲母を多量に含む	突帯
92	〃	弥生土器壺	(23.7)			内面 ヨコナデ・ミガキ 外面 ヨコナデ・ナデ	内面 にぶい黄橙 外面 橙	砂粒を少量、細砂粒を多量に含む	突帯
93	〃	弥生土器壺				内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 橙 外面 橙	砂粒、細砂粒を含む	沈線
94	〃	縄文土器壺				内面 条痕 外面 ナデ	内面 浅黄橙 外面 浅黄橙	細砂粒を含む	連点文
95	〃	弥生土器壺				内面 ハケ 外面 ハケ・ミガキ	内面 にぶい橙・褐灰 外面 にぶい橙・黒褐・暗褐	黒、灰色、黒輝の粒子を多く含む	突帯

出土遺物観察表４　（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）

（　　）は反転復元径

番号	遺構名	種類・器種	法量（cm）			器面調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
96	12号土坑	弥生土器 壺		8.2		内面 ナデ 外面 ハケ・ミガキ	内面 にぶい橙 外面 にぶい橙	褐色、灰色、乳白色の砂粒を多く含む	
97	13号土坑	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 橙	砂粒を含む	突帯
98	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 橙	２㎜以下の灰色の砂粒及び、(淡)赤褐色、白色の微細な砂粒を含む	刻目突帯
99	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 明黄褐 外面 明黄褐	細砂粒を少量含む	
100	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ・ハケ 外面 ナデ	内面 橙 外面 にぶい黄橙	砂粒を含む	
101	〃	弥生土器 甕		7.2		内面 ナデ 外面 ナデ・ハケ	内面 灰黄褐 外面 にぶい黄褐	白色の微小な粒、乳白色の粒、砂粒等を含む	
102	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 橙 外面 橙	砂礫わずか、半透明の粒が少量、細砂粒を含む	刻目突帯
103	14号土坑	弥生土器 甕		7.5		内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 にぶい黄橙 外面 浅黄橙	砂粒、細砂粒を多量に含む	
104	〃	弥生土器 壺	(26.6)			内面 ミガキ 外面 ナデ・ミガキ	内面 にぶい黄橙・灰黄褐 外面 にぶい黄褐・褐灰・灰褐	砂粒を含む	突帯
105	〃	弥生土器 壺		(8.5)		内面 ナデ 外面 ミガキ	内面 明褐 外面 明赤褐	２㎜以下の赤褐、灰、黒色の砂粒を含み、１㎜以下の透明な光る粒も少量含む	
107	17号土坑	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 橙 外面 橙	２㎜未満の褐色、黒、灰色の砂粒を含む	刻目突帯
108	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 橙 外面 橙	細砂粒を含む	刻目突帯
109	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 にぶい褐色 外面 灰赤	黒く、光沢のある粒子、細砂粒を多く含む	突帯 沈線
110	〃	弥生土器 壺	(25.3)			内面 ハケ 外面 ナデ・ヨコナデ・ハケ	内面 にぶい黄橙 外面 橙	砂粒を多量に含む	
111	〃	弥生土器 壺				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 にぶい橙	細砂粒を含む	沈線
112	〃	弥生土器 壺				内面 ナデ 外面 ヨコナデ・ミガキ	内面 橙 外面 赤褐・黒	乳白色、無色透明、黒などの光る微細粒を多量に含む	突帯
113	〃	縄文土器 深鉢				内面 ナデ 外面 条痕・ナデ	内面 明黄褐 外面 にぶい黄橙	赤褐、灰色の細砂粒及び透明の光る粒を含む	刻目突帯 孔列文
114	〃	縄文土器 深鉢				内面 条痕・ナデ 外面 条痕・ナデ	内面 にぶい黄褐 外面 褐灰	２㎜以下の褐色、灰色の砂粒、微細な白色粒を含む	刻目突帯 孔列文
115	〃	土師器 高坏		10.1		内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 橙	砂粒と細砂粒を少量含む	
116	〃	須恵器 坏身	(12.3)	(6.8)	4.6	内面 ナデ 外面 ナデ・ケズリ	内面 褐灰 外面 褐灰	白色の砂粒と細砂粒を少量含む	
121	１号溝状遺構 （B区）	土師器 甕		(6.5)		内面 ナデ・ハケ 外面 ケズリ・ハケ	内面 黒褐・橙 外面 にぶい黄橙・褐灰	黒褐の砂粒を少量含む 褐黒、褐色の砂粒を多量に含む	
122	〃	土師器 甕		5.1		内面 ハケ・ナデ 外面 ナデ・ハケ	内面 にぶい褐・黒褐 外面 にぶい褐・褐灰	褐の砂粒を多量に含む　暗褐の砂礫を含み褐、暗褐等の砂粒を多量に含む	
123	〃	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ナデ・ヨコナデ	内面 明赤褐 外面 橙・にぶい褐	砂粒を含む	突帯
124	〃	土師器 坏	(13.4)	(5.7)	4.2	内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 橙	細砂粒を多量に含む	箆切り底
125	１号溝状遺構 （D区）	土師器 甑		(9.4)		内面 ナデ 外面 ナデ	内面 にぶい黄橙 外面 明黄褐・にぶい黄橙	砂粒を少量、細砂粒を多量、砂礫をわずかに含む	牛角把手
126	〃	土師器 甑				内面 ナデ・ハケ 外面 ナデ・ハケ	内面 にぶい橙・褐灰 外面 にぶい褐・褐灰・にぶい橙	砂粒、細砂粒を多量に含む	牛角把手
127	〃	土師器 壺	11.8			内面 ハケ・ナデ 外面 ハケ・ナデ	内面 赤橙・明黄褐・褐灰 外面 黄橙・赤橙・褐灰	砂礫少量、砂粒、細砂粒を多量に含む	
128	〃	土師器 壺				内面 ユビナデ 外面 ナデ	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい黄橙	細砂粒を含む	
129	〃	土師器 高坏				内面 ナデ・ユビナデ 外面 ナデ	内面 橙 外面 橙	細砂粒を含む	
130	〃	土師器 高坏		(11.7)		内面 ナデ 外面 ナデ・ミガキ	内面 橙・にぶい橙 外面 橙	砂粒、光る微粒子を少量、細砂粒を多量に含む	

出土遺物観察表５　（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）

（　　）は反転復元径

番号	遺構名	種類・器種	法量（cm）			器面調整	色調	胎土	備考
			口径	底径	器高				
131	１号溝状遺構（D区）	土師器 高坏		(12.4)		内面 ナデ 外面 ナデ	内面 橙・オリーブ灰 外面 浅黄橙・オリーブ灰	砂粒少量、細砂粒多量に含む	
132	〃	土師器 **椀**	(12.0)	(4.8)	3.9	内面 ナデ 外面 ミガキ	内面 にぶい橙 外面 橙	砂粒、細砂粒を含む	
133	〃	土師器 坏	(15.3)			内面 ヨコナデ・ミガキ 外面 ヨコナデ・ミガキ	内面 にぶい橙 外面 にぶい橙	褐灰の細砂粒が多量に含む	
134	〃	須恵器 壺	(12.8)			内面 ナデ 外面 ナデ	内面 灰白・灰 外面 灰白・灰・灰オリーブ	細砂粒を多量に含む	
135	〃	弥生土器 甕		(24.7)		内面 ナデ 外面 ナデ・ハケ・ヨコナデ	内面 にぶい黄橙・にぶい橙 外面 にぶい黄橙	２mm以下の褐、灰の砂粒、１mm以下の透明の光る粒を含む	突帯
136	〃	弥生土器 壺				内面 ミガキ 外面 ミガキ	内面 明赤褐・にぶい赤褐 外面 橙・暗赤褐	透明や、黒く光る粒を含み、砂粒を多量に含む	重弧文 平行沈線文
137	２号溝状遺構	弥生土器 壺				内面 ナデ 外面	内面 浅黄橙 外面 浅黄橙	褐色の砂粒を多量に含む	刺突連点文
138	〃	土師器 甕		6.5		内面 ナデ・ハケ 外面 ナデ・ハケ・ケズリ	内面 褐・灰黄 外面 にぶい橙	５mm以下の褐色、灰色系の砂粒を多量に含む	
139	３号溝状遺構	須恵器 鉢		(10.4)		内面 ナデ 外面 ナデ・タタキ	内面 青灰 外面 青灰	精良	自然釉
150	５号溝状遺構	弥生土器 甕		(6.2)		内面 ハケ 外面 ハケ・ミガキ	内面 黄橙 外面 橙・にぶい褐・黒	灰・乳白、褐色の細砂粒多量、透明の光る粒を含む	
151	〃	弥生土器 壺				内面 ハケ・ミガキ 外面 ミガキ	内面 にぶい橙 外面 明赤褐・にぶい赤褐灰	ガラス質、艶のある黒などの光る粒を多量に含む	突帯
154	９号溝状遺構	須恵器 坏身		(8.3)		内面 ナデ 外面 ナデ	内面 褐灰 外面 褐灰	細砂粒をごく少量含む 精良	高台付
155	10号溝状遺構	須恵器 壺				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 褐灰 外面 褐灰	細砂粒をごくわずかに含む 精良	
156	１号道路状遺構	須恵器 硯				内面 ナデ 外面 ナデ	内面 灰白・褐灰 外面 灰	良好	円面硯
164	１号柱穴	土師器 高坏				内面 ミガキ 外面 ナデ・ケズリ・ミガキ	内面 橙 外面 浅黄橙	白く光る微小な粒と乳白色と黒の細砂粒を含む	
166	３号柱穴	土師器 土錘				内面 外面	内面 外面		
167	４号柱穴	弥生土器 甕				内面 ナデ 外面 ヨコナデ・ナデ	内面 浅黄 外面 浅黄橙	２mm以下の暗褐色、赤褐色の砂粒、１mm以下の黒く光る粒を含む	刻目突帯
168	５号柱穴	弥生土器 甕				内面 外面	内面 浅黄橙 外面 浅黄橙	細砂粒を多量に含む	刻目突帯

出土遺物観察表 6　（陶器・磁器）

（　　）は反転復元径

番号	出土遺構	種類・器種	法量（cm）			装飾				底面・内底	産地	備考
			口径	底径	器高	絵付・釉薬	文様					
							外面	内面	見込			
117	18号土坑	陶器甕	(32.5)								肥前	17C
118	〃	土師器焙烙	(25.2)									穿孔
120	21号土坑	陶器擂鉢	(22.0)	(12.2)	6.2						肥前	
140	3号溝状遺構	陶器擂鉢										
141	〃	陶器碗	(15.5)	(7.5)	7.0							端反、土師器か？
142	〃	陶器		(4.7)		褐釉				露胎		
143	〃	磁器碗	(11.6)	(4.0)	5.6	透明釉 染付	丸文、圏線	圏線	五弁花文	渦福銘？	肥前	畳付釉はぎ
144	〃	磁器碗		4.6		半透明釉 染付	雪輪文、 梅樹文、圏線			大明年製崩れ銘	肥前	畳付釉はぎ、貫入
145	〃	磁器蓋	(9.2)	(3.8) 摘み径	3.0	透明釉 染付	広葉？、圏線				肥前	コンニャク印判、摘み先端釉はぎ、口縁露胎
146	〃	磁器碗	(7.6)	(3.7)	5.0	透明釉 染付	輪花文、圏線	圏線	五弁花文		肥前	18C後半、畳付釉はぎ
147	〃	磁器香炉	(10.3)	(4.3)	4.3	青磁釉			露胎	露胎		三足
148	4号溝状遺構	磁器小坏				透明釉 染付					肥前	畳付釉はぎ
157	1号道路状遺構	陶器擂鉢		(10.5)								
158	〃	陶器碗			6.2	黄灰						畳付釉はぎ・砂目付着、貫入
159	〃	陶器皿	(12.7)	4.9	3.7	内面　青緑釉 外面　緑灰釉				露胎、蛇の目釉はぎ、砂目付着		外面体部下位露胎
160	〃	磁器皿				透明釉 染付	草花文、圏線	圏線	草花文？		肥前	畳付釉はぎ
161	〃	磁器碗	(11.1)	(4.2)	6.5	内面　透明釉、染付 外面　青磁釉		四方襷文、 圏線	五弁花文	渦福銘	肥前	畳付釉はぎ
162	〃	磁器碗	(12.5)			透明釉 染付	竹笹文、 草花文、圏線	圏線	五弁花文		肥前	
163	〃	磁器碗	(10.8)	4.3	5.0	透明釉 染付	梅樹文、圏線			蛇の目釉はぎ	肥前	畳付釉はぎ
165	2号柱穴	陶器鉢	(16.7)	5.5	8.1	黄褐釉				蛇の目釉はぎ、露胎		片口、外面体部下位以下釉はぎ、砂目付着
170	7号柱穴	磁器碗	(11.9)			透明釉 染付	草花文、圏線	圏線			肥前	
171	8号柱穴	陶器碗		4.6		黄灰釉						畳付釉はぎ、砂目付着、貫入
172	9号柱穴	陶器碗		(4.8)		黄灰釉						畳付釉はぎ、砂目付着、貫入
173	10号柱穴	陶器皿	(13.2)	4.5	3.3	内面　緑灰釉・青緑釉 外面　緑灰釉				蛇の目釉はぎ、砂目付着		外面体部下位露胎
174	11号柱穴	土師器皿	(13.0)	4.4	3.7	白釉				内底露胎		外面体部下位以下露胎
176	13号柱穴	陶器碗			4.4	赤褐釉						畳付釉はぎ、砂目付着、貫入
177	〃	陶器皿		7.3		黄灰釉				蛇の目釉はぎ、砂目付着		外面体部下位以下露胎
178	14号柱穴	土師器火容	(11.0)	(11.9)	3.5		刺突連点文					

第Ⅲ章　まとめ

近世以降について

今回の調査で掘立柱建物は８棟検出された。共通する調査結果として、出土遺物が少なく時期を決定することができなかった。遺物の出土した１号掘立柱建物においても、孔列文土器、弥生土器のみで古墳時代の１号溝状遺構を切って構築されているため、これらの遺物は流込したものと考えられる。１号掘立柱建物の東西辺に平行する状態で検出された１号柵列のＰ３からはキセルの吸い口が埋土中位から出土しており、１号柵列が１号掘立柱建物に付設するものであることを指示するならば、１号掘立柱建物はキセルの初伝来とされる近世初頭以降のものであると考えられる。この他、近世以降の遺構と考えられるものには18～21号土坑、２～10号溝状遺構、１号道路状遺構があり、土坑は楕円形、不定形プランを呈しており、各土坑においても遺物が破片で少量しか出土していないため、ごみ穴であったと考えられる。溝状遺構は、出土遺物から３・４号溝状遺構が18世紀後半と考えられ、６号溝状遺構が旧畑地を区画する位置沿いで検出されたことから、比較的新しい時期（近代～現代）のものと考えられ、６号溝状遺構の埋土に酷似した埋土の７～10号溝状遺構もその時期と考えられる。１号道路状遺構は当初、中世山城に伴う施設として考え調査にあたったが、路面の高さ付近で18世紀後半以降の遺物が出土したため、その時期に構築されたものと考えられ、その東側延長上にはコンクリートが幅80㎝、長さ約５ｍに渉って敷かれていたことから、現代まで使用された丘陵上に上り下りするための道路であったと考えられる。

古墳～奈良時代について

古墳時代から奈良時代の住居は７軒検出された。出土須恵器から１号竪穴住居は陶邑編年Ⅲ形式１段階、３号竪穴住居がⅢ形式３段階、５・７号竪穴住居がⅣ形式１段階に併行すると考えられる。また２・６号竪穴住居より出土の甕は、宮崎市吉村町大町遺跡における集落のピークとなる６世紀後半～７世紀前半の住居出土の甕に酷似することからそれらの時期に平行すると考えられる。以上のことから本遺跡の竪穴住居は６世紀後半もしくは７世紀前半から８世紀初頭に構築されたと考えられる。今回の調査では明確な竪穴住居の検出は７軒であったが、Ｂ区北側では２箇所程で貼床のみが検出され、検出された竪穴住居以外にも存在していたことが考えられる。竪穴住居の他、２号竪穴状遺構、１号溝状遺構、７号土坑がこれらの時期に相当すると考えられる。本遺跡に比較的近い位置にある蓮ヶ池横穴群もこれらの時期に一致するが、１時期に存在した住居が１～２軒と集落の規模が小さいため、横穴群、本遺跡の集団との関連性については、現段階ではその想定を避けておきたい。

縄文時代晩期、弥生時代の土坑について

今回の調査で、縄文時代晩期、弥生時代の遺構と考えられるものは１号竪穴状遺構、１～

7・11～17号土坑の15基があり、A区、B区北側、D区の、本遺跡内でも偏った箇所で検出された。そのうち1・4・11～17号土坑は深さ、断面形態の観点から貯蔵穴として使用されたと考えられ、これらは断面形から3型に分類できる。

フラスコ型a－断面形がフラスコ状になるもの（4号土坑）

フラスコ型b－壁面の一部を除いてフラスコ状になるもの（1・11～14・17号土坑）

ビーカー型　－断面形がビーカー型になるもの（15号土坑）

不明　　－16号土坑

フラスコ型bに相当する土坑にみられる特徴について、フラスコ状に膨らむ位置が南北軸より以西に設けている。それに対し、フラスコ状にならない壁面は南北軸より以東に設けられ、幾つかのパターンがみられる。傾斜をしながら底面に達するもの（1・17号土坑）、壁面中位でテラスを持つもの（11号土坑）、壁面がほぼ垂直に立つもの（12号土坑）、検出面近くでテラスを持つもの（13・14号土坑）があり、これらフラスコ状にならない壁面は収納物を底面に納める際に使用していた施設、若しくはそれらの施設を設置していた場所ではないかと想定したい。これら、貯蔵穴土坑は弥生時代前期後葉～中期中葉（石川編年Ⅰc～Ⅱc期）と考えられる。

その他の2・3・5・6号土坑は断面形は15号土坑に類似するが、貯蔵穴土坑に比べ、底面に近いレベルで遺物がまとまって出土している。付近の貯蔵穴土坑（1・4号土坑）に比べ浅い。以上の観点から貯蔵用とは別の目的で使用されたのではないかと考えられる。これらの土坑は群集し、遺構形態が酷似することから、安易にはほぼ同時期に構築されたものと考えられるが、2・5・6号土坑が弥生時代前期後葉～中期初頭（石川編年Ⅰc）であるのに対し、3号土坑が縄文晩期後半（遺物62　孔列文土器）と逸脱している。3号土坑と同時期に比定できる遺構が他には検出されていないものの、他の時期の遺構内からは孔列文土器が数点出土しているため、すでにこの時期には本遺跡付近に集落が存在していた可能性が考えられる。また、その後の弥生の土坑を設けた集団と継続したか否かについて明確にすることはできなかったが、遺物55・137は頸部で1段の稜を持て肥厚し、口縁部に達することから、他の弥生土器より古相の形態をしており、これらの遺物は双方の時期を繋ぐ可能性のある資料であると考えられる。

今回の調査では弥生時代のものとして比定できる遺構は以上に挙げた遺構以外は確認されず、集落を形成するための要素となるべく竪穴住居等の他の遺構を確認することができなかった。その原因として土壌の削平の著しい本遺跡において、通常、貯蔵穴よりも掘方の浅い竪穴住居がすべて破壊されてしまったためか、もしくは本遺跡のA、B、D区が集落形態の中で土坑のみを構築する区域で、居住域は周辺の丘陵下、別の丘陵上など他の場所に形成されていたかの2点が考えられる。また、これら土坑群は中期中葉をもって構築されなくなっており、他の遺構でもそれ以降の遺物は出土していないことから、それ以降は、本遺跡における弥生時代の集落は廃絶されたものと考えられる。

本遺跡北東約2㎞の標高5ｍの低地に立地する保木下遺跡では、旧河道への流れ込みではあ

るが弥生時代前期末から中期中葉の遺物が大量に出土しており、周辺地域に北ヶ迫遺跡の弥生期と同じ時期に集落が存在していたことを想起させる。この他大淀川下流域では、近年、弥生時代の集落の調査例が増えつつある。環濠集落では前期末から後期後半の下北方町下郷遺跡、中期中葉の大字跡江石ノ迫第２遺跡（註２）、中期後葉から後期後葉の国富町塚原遺跡があり、これらは平野部を望む台地もしくは丘陵の北東側縁辺部に集落を形成するという共通の立地環境を持っている。特に下郷遺跡は北ヶ迫遺跡から南南西約4.2㎞に位置し、北ヶ迫遺跡の土坑群と同時期に環濠集落を開始しており、集落が一時縮小する中期中葉の時期（註３）に北ヶ迫遺跡では集落を廃絶している。また２遺跡のほぼ中間地点にあたる標高約10ｍの低地には黒太郎遺跡（註４）が存在し、集落の開始、終焉ともに下郷遺跡と一致している。黒太郎遺跡は調査範囲が500㎡と狭く、現時点ではその集落規模は不明であるが、周辺一帯の拠点集落である下郷遺跡と密接な関係を持っていたものと考えられる。今回の調査では下郷遺跡と北ヶ迫遺跡との直接的な関係を想定することはできなかった。しかし、大淀川下流左岸においては新たな集落形態であり、台地上に環濠集落を形成する集団、台地上に集落を形成するが環濠を構築しない集団、低地または微高地に集落を形成する集団の相互関係の想定については今後の調査例を待ちたい。

最後になりましたが、例年になく暑く乾燥した夏の最中、発掘調査に従事して頂いた作業員の皆様方に心からお礼を申し上げたいと思います。

註１　参考文献以外に平成10年11月みやざき考古36回例会の発表資料も参考

註２　環濠集落は中期中葉であるが、弥生時代後期後葉～終末にも集落を形成

註３　下郷遺跡に隣接する南側の丘陵東側斜面裾の宮崎大学茶園遺跡からはその時期に相当する遺物が大量に出土している。

註４　平成11年度報告書刊行予定

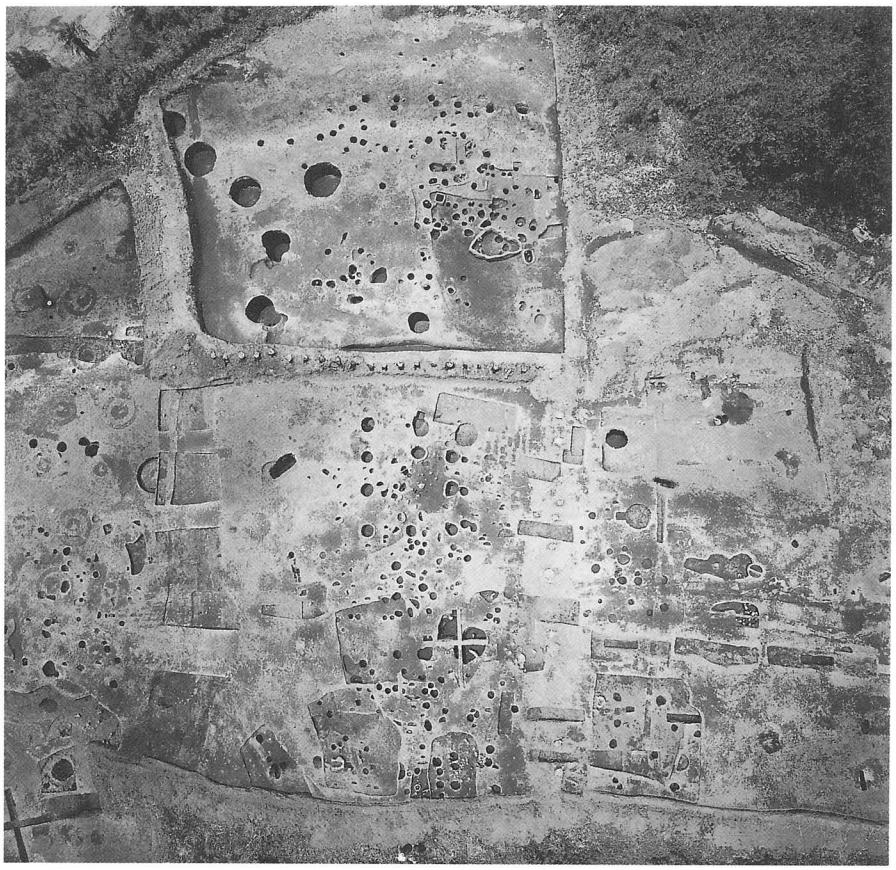
〈参考文献〉

・『天祐館遺跡』　佐伯市教育委員会　1998
・中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』　1981
・石川悦雄　『宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（ＭＫⅡ）』『みやざき考古』第９号
・石川悦雄　『日向考古資料Ⅰ』『研究紀要』No10　宮崎県総合博物館　1984
・『保木下遺跡』　宮崎県教育委員会　1986
・『市位遺跡』　宮崎県教育委員会　1998
・『塚原遺跡』　国富町教育委員会　1995・1996
・『石ノ迫第２遺跡』　宮崎市教育委員会　1999
・『大町遺跡』　宮崎市教育委員会　1998
・『東宮遺跡』　宮崎市教育委員会　1999
・『垣下遺跡』　宮崎市教育委員会　1991
・『下郷遺跡』　宮崎市教育委員会　1999

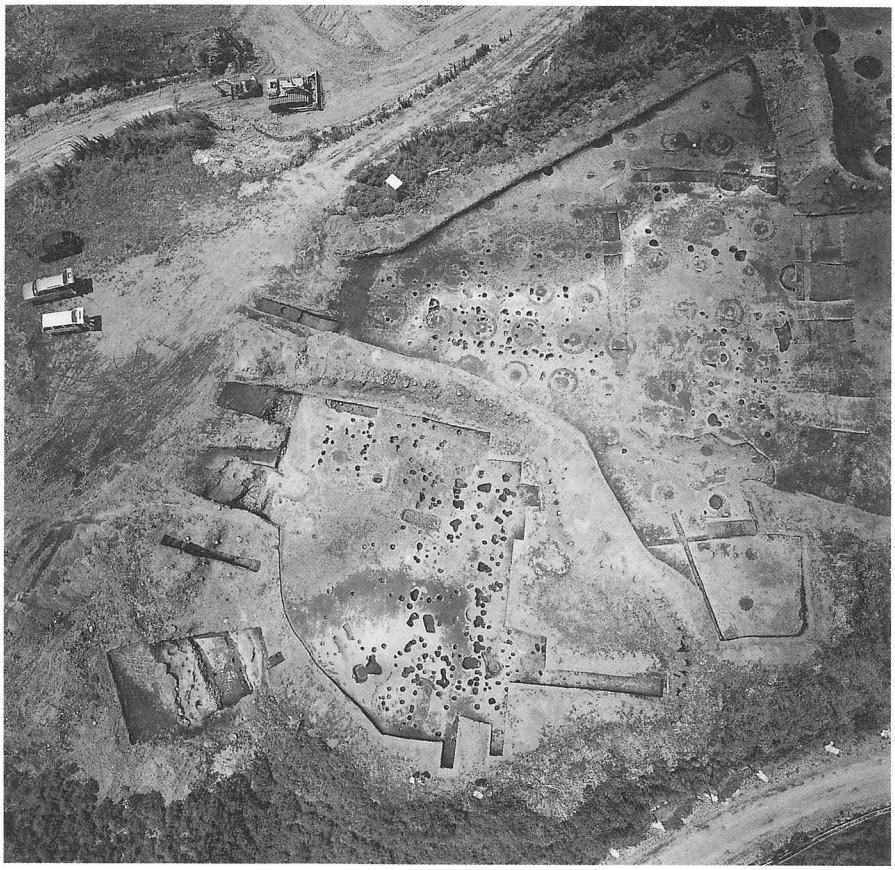
図　　版

図版１　北ヶ迫遺跡全景 ①（東上空より）

図版２　北ヶ迫遺跡全景 ②（東上空より）



図版 3
Ａ区南側・Ｂ区北側・
Ｄ区周辺（上空より）



図版 4
Ｂ区南側・Ｃ区周辺
（上空より）